
劇場『すぽっと』

照明係

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

劇場『すぽっと』

【Nコード】

N7768C

【作者名】

照明係

【あらすじ】

ようこそ劇場『スポット』へ。当劇場では、とあるテーマに沿った小さな小さな物語たちに、我々照明係が光を当てています。悲しいお話。楽しいお話。優しいお話。怖いお話。暗闇の中で、物語たちはひっそり息を潜めているのです。そんな物語にも光を。我々はそっと背中を押しているのです。さあ、間もなく開演です。浮かび上がる物語の数々を、ごゆっくりお楽しみ下さい。

初めに

劇場『すぽっと』へようこそ。

踊り子たちはふらりと当劇場に立ち寄っては、去ってゆきます。

一介の照明係には、その名を知ることができない者たちもいます。

感想や評価といったおひねりを投げ入れてくださっても、直接お返事を返すこともできません。

それでもいいと仰る優しい方は、どうぞ踊り子たちを喜ばせてやってくださいませ。

各作品の下に、返信用の掲示板を作っております。

ふらりと立ち寄った踊り子が、返事を書き入れることもあるでしょう。

どうか海のごとく深い御慈悲を持って、それでご容赦くださいませ。

では、開幕でございます。

「樹齡三千年の樹の下で」by へボ

草原に一本の大樹が立っていました。陰のない緑の海で、樹はたった一つだけ陰を生み出していました。そのため、樹の下にはたくさん動物が来ていました。皆大樹の下では争わず、静かに身を休めていました。

ある時から大樹に一羽の梟が住み着くようになりました。

彼は物知りでたくさんを知っていました。草原の端にある高い山を越えた先の世界の話や、一面真っ青な海の話、煌めく星たちの伝説など、彼は樹の下の動物達に教えてあげました。

いつからか樹の下に明るい声が響くようになりました。動物達は前にも増して樹の下に集まるようになりました。

数年が経ちました。物知り梟はその生涯を終えました。彼の話を楽しみにしていた動物達は皆涙を流して悲しみました。彼が動物達に与えたものはかけがえのないものだったのです。

梟は死ぬ間際にこんなことを言い残しました。

「生きるということとはなんと残酷で美しいことなのだろうか。

私はこれまで数多くの友人を作り、彼らの死を見守ってきた。その度に身を引き裂かんばかりの悲しみが私を襲い、絶望のどん底へと落ちていった。

しかし、彼らがいなかったのなら、私がこの世界に生きていなかったのならば、私は彼らと友人になることは出来なかった。彼らとの楽しい毎日は生まれなかった。

……生きるということは残酷だ。辛くて悲しくて耐えがたい悲しみに何度も襲われる。

だが、とても素晴らしいこともあるのだ。皆が今こうして私を見守ってくれていることが何よりの証拠だよ。私は嬉しい。心から嬉しい。この世界に産まれたことにこの上ない幸福を感じている。

だから皆も悲しまないでほしい。恨まないでほしい。私が死にゆくこの世界のことを。この世界にはまだまだ美しいことが沢山ある。どうかその輝きを見失わないでくれ」

動物達は梟の亡骸を樹の下に埋葬することにしました。梟が彼らに多くの知を与えてくれた場所を彼の墓標にすることにしたのです。

深く掘った穴の中に安らかに瞳を閉じた梟を安置する時、動物達は再び涙を流しました。動物達は嗚咽を堪えながら、一匹ずつ梟に土を被せていきました。

それから三千年。緑の草原はコンクリートに押し潰され、真っ青だったあの空は灰色に濼んでしまいました。ビル街の中の一角、日の当たらないじめじめした場所に樹はひっそりと立っていました。葉は枯れ落ち、幹は干からびて、亡骸となって立っていました。

今、この世界に自然はありません。知を持った梟も、その話を楽しみにする動物達もいません。灰色の街とヒトばかりが、もくもくと吐き出される煙が覆う世界にいます。疲れが全てを支配していました。世界は辛く苦しいことを全面に押し出すようになっていました。

一人の少女がビルの間を駆けていきます。異臭を放つゴミなど意にもかかず、可愛い洋服を汚しながら駆けていきました。手に清んだ水の入った上呂を持っています。

少女は大樹の前にしゃがみました。劣るように慈しむように上呂を傾けました。小さなシャワーの下にあったもの、幼い双葉でした。

「どうか輝きを見失わないでくれ」

梟の言葉が、動物達の笑い声が、双葉にはちゃんと聞こえていました。

「螢火」by ジル

風が、女の頬をなぶった。

山から降りてくるその風は、目の前に広がる風景とは裏腹に、青き木々の香りを伝えている。

もののふどもの声はすでに遠く、すでに戦場働きの盗人どもも仕事を終えたのだらう、下帯ひとつの男どもが、死屍を累々と晒していた。

「あんたあ」

悲痛な女の叫び声が、小川のせせらぎをかき消した。それは山々にこだまを返され、茜色の空に吸い込まれていく。

女は初めよろけるように、そしてしまいには裾の乱れるのもかまわずに、死人の間に駆け入った。

「どきな。あっちへいけ」

があ、と恨めしげな声を上げて、死体をついばんでいた鳥が飛び去る。それには見向きもせず女は泥の中に膝をつき、死体の顔を覗き込む。

違う……

こけつまろびつ、女は次の死体に向かう。その度に女の周りを鳥が飛び惑う。違う、違う、違う。まるで女は鳥と呼び交わすかのようにそう叫びながら、いつの間にか草履を失った素足を青薄で傷だらけにしながら、死体から死体へと飛び回る。

（この戦で手柄をたてりゃあ、親父様も文句はあるまい。帰ったら祝言じゃ）

あんたあ。

鳥が、嘆く。

茜の空は山際にその色をわずかにとどめ、ポツリ、ポツリと星の光が降りはじめた。

烏どもも飽食したのか、遠く山の懷に帰っていった。女は一人、冷えた体を抱きもせず、泥の中に座り込んでいた。

「あんたは嘘つきじゃ」

（これをくれるんか）

（返せよ。母様の形見じゃ）

おう、と笑って背を向けたあの笑顔は、もうどこにもない。

「喉が渴いた」

せせらぎの音が女を誘う。女はいざるように小川へと向かった。しかし萎えた足は草にとられ、川岸を転げ落ちてしまう。

「ここにも……おつたか」

ようやく体を起こし、ついた手に、もうなじんだ命を持たぬものが触れる。

女は何の期待も持たぬまま、その顔を覗き込んだ

あ……

闇の中、目を凝らす。泥に汚れた手を伸ばして、その輪郭をなぞる。

「あんたあ」

女は、ようやく捜していたものに出会えた。しかしそれは、女に喜びをもたらすはずもなく。

ただ、鎧をはがれた男の体を無意味になでるだけ。何度も顔をうずめた厚い胸。深くえぐられた腹。肩。腕。そして、硬く握り締めたままのこぶし。

そのこぶしが、女の手が触れたとたんに緩んだ。男が握っていたもの

「これ……」

それは、強く握り締めたためか幾本もの歯を欠いた、櫛だった。御守り代わりにと、女が持たせた柘植の櫛。それを最後に握り締めた男は、何を思っていたのだろう。

「すまなんだ」

渴ききつたはずの女の体から、涙があふれた。

「あんたを、嘘つきじゃ言うてしもうた」

まだ櫛をのせたままの男の手を、腕を、掻き抱く。櫛にしずくが、ポトリ、ポトリと落ちる。

そのとき、涙の水玉に、青い光が暗く映った。それは、淡く、そしてもつと淡く、脈動を繰り返す。

（ほんまはの、戦は好かん。こうやって蛍を見ながらお前と酒を酌み交わせさすりゃ、それが一番じゃ）

それはほんの数日前のことだったのに。

「ああ……」

女は、瞬きもせぬまま、泣き続けた。涙に歪む夜空に、一つ、二つと蛍が舞う。

女はただ、泣き続けた。何時しか、幾百の蛍が、あたりを飛び交うようになっても。

蛍火の華燭が、二人を冷たく照らしていた。

「ヘイ！ Mr. サンシャイン！」 by 悪魔

「おい、ミスタ・サンシャイン。約束が違うだろ。

俺とミスタ・ブルーミングの取り分がどうして一緒なんだ」

めんどくさい奴だ。俺は、そいつの鬪牛みたいに怒り狂った目に
辟易している。

いっそ殺しちまうか、こいつが大統領を殺しちまったように。

「そう怒るなよ。ミスタ・ブルーミングは良くやってくれたじゃね
えか」

「ああ、あいつは良くやったよ。おかげでこっちは形無しだ」

駄犬め。素直にしていれば長生きできたものを。

これ以上、一言でも突っかかってくるようならば、俺はこいつを
殺してしまおうと思った。

「はつきり言おう。ミスタ・ブルーアイ。君は今まで良くやってく
れたが

今の君に大きな仕事を任せることはできない。お払い箱なんだ」

「なんだと」

ブルーアイの瞳が真っ赤に燃え上がる。

だが、俺は少しもたじろがない。殺そうと思えばいつだって殺せ
るのだ。

スキルだけをとって比べれば、俺の方が数段上だった。

「謝るなら今が最後のチャンスだ。ミスタ・サンシャイン

その腐った目でも俺が誰だか分かるだろ。殺し屋ランク一位のミ
スタ・ブルーアイだぜ

それを忘れてもらっちゃ困……」

言い切らないうちに、そいつの心臓は弾けとんだ。

バレルの銃口からは小さく煙が燻っている。

ミスタ・サンシャイン。それは引退した史上最強の殺し屋の名前
だ。

「ねえ、あんたの若い頃の冒険談を聞かせてよ。ワクワクするやつをさ」

ミス・クレツシエンドはカラリカラリトグラスの中の氷塊を揺らして、俺の肩に寄り添った。

酔っ払ったとき、妙に可愛らしく見えるのがこの女の欠点だ。

「どれもこれも染みつたれた人殺しの話だ」

「そりゃあ、あんた人殺しだからよ。でも、どうして辞めたんだい
五年前に引退した時だってまだ35歳だったんでしょ。まだ現役
だったのに」

今だって現役の人殺しさ。今さっきだって飼い犬を一匹始末して
きたんだ。

「子供の頃、俺は絵描きになるのが夢だったんだ」

「へえ、意外ね」

言いつつ、ミス・クレツシエンドは新しく酒を注ぎなおしていた。

こいつ、聞いているのか。まあ、訊いていなくても良い。今夜は
感傷に浸りたい気分だ。

「だが、筆一本で生きていくのは厳しい。俺は筆をとりながらも
働ける口はないかと方々を回った。

そんな仕事あるわけない。そう結論付けようとしたときだったな。
この稼業をしまったのは」

「金にはなるし、実働時間はそれほどないものね」

「そうだな。俺も最初はこれなら上手いことやれると思いついて
いた

だが、実際はそんな楽な仕事じゃない。気を抜けば命をとられ
る職だ」

「もしかして、絵を描きたくなつたから引退したの？」

まさか。彼女が生真面目に言うので、俺は思わず噴出した。

本当に絵を描きたいのなら、裏方も辞めているさ。

今だつて、命を危険に晒しているのは同じだ。

「なんで笑うのよ」

ミス・クレツシエンドは怒った振りをして、私の肩を軽く叩いた。

「すまない。だが、それは違うんだ。俺は、自分の中にあつたインク、

つまり絵を描きたいという衝動が枯れはてていたことに気付いちまたのさ。

殺傷者数ばかりが気になって、それ以外の全てを糞のように扱っていた。

そんな自分が空しくなつて表舞台を降りた」

「ふうん。それであんたは何がしたいのさ。ミスタ・サンシャイン」

「さあね。自分のことなんて、どこ吹く風さ」

明日生きているのかも分からない、こんな立場だ。

未来のことなんか考えている余裕なんかない。

俺の希望は、今日を生き延びて明日の朝日を拝むことだけだった。

「七色雲」byダディ

橙色に染め抜かれた夕暮れ時の小川。
澄んだせせらぎの聞こえる畑の中。

そこで独り涼んでいた私の肩に、「ちよいとようござすか」の一言もなく、黒い大きな影が降りてきた。

影の主は鴉だった。黒い羽は夕暮れの衣をまとい、僅かに色づいて
いる。

「何の用？」

私が問うと、鴉は人間が欠伸をするようにあんどくとくちばしを開
け、乾いた声で語りかけてきた。

「環水平アークって知ってるかい？」

聞きなれない単語に私が目を瞬かせると、大鴉は先まで黒いくちば
しを打ち鳴らし、「かあ」と笑った。

「知らないのか」

人を馬鹿にした口調で追い討ちをかけてくる。

「お前さんの頭は、見た目の通りすつかすかかい？ 藁ばかり詰まっ
てるしね。」

そついや藁は異国の言葉じゃストロウと言っらしいぜ。なんとも
間の抜けた響きじゃないか。お前さんにびったりだ。かかか」

「鴉、あんた、私にそんなことを言いにわざわざ降りて来たの？」

「動けぬ一本足の鴉脅しが寂しそつにしてたから、今日もちよいと
話し相手になつてやろうと舞い降りたのさ。かあかあかあ」

「別に寂しくないわ……それに、あんたみたいな物知り顔で人を馬
鹿にする奴に構われるぐらいなら、寂しいほうが、まだましよ」

「つれないね。俺は馬鹿にしてるつもりはないぜ。それに、今日は
お前にいいものを見せてやろうと思つてやつてきたのさ」

黒い翼を二度羽ばたかせ、胸を張る鴉。

いいものを見せる？ そんな戯言を信じると言うのか。

鴉はいつも、私の頭をむつかしい言葉で攪拌するのだ。今日もそこに違いない。

「いいものね……どうせまたくだらない物を見せるんでしょ？この間は世にも珍しい平べったいカブト虫って言って、ごきぶり見せてくれたわよね」

「かかかか。そんなこともあったかな。でも、今日は違う」

言うが早いか、鴉は右の羽で川の上の空を示した。

「見てごらん」

いつもと違う優しい響きの声につられて、私は鴉の示す空に目をやった。

だが、頭にかぶされた麦藁帽子が、視界を遮っている。鴉の示す空がよく見えない。

「おっと、自分じゃ取れないか。どれ」

鴉はくちばしで私の麦藁帽子をついばむと、ひょいと背後に落としてくれた。

世界が広がり、空が目映る。

言葉もないとは、まさにこのことだった。

夕暮れの空に浮かぶ雲が、虹色に染まっている。ゆったりとした風に流れる雲の動きに合わせて、七つの色がスローテンポのダンスを舞っている。

彼岸の彼方から現れた極楽の乗り物のような雲

この畑に立たされて十数年、こんな美しいものは見たことがなかった。

「あれが答えさ。環水平アークってやつさ」

「あれが……なんて綺麗なの」

「本当はこの条件じゃ現れないんだがね。俺は太陽の神様だから、ちよいと空のまつりごとにちよつかいだせば、ご覧の通りさ」

自画自賛じみた言葉の後に、薄紫に染まり始めてきた空の際まで届く、大きな笑い声を上げる。

それがなんだか妙に微笑ましくて、私は静かに笑みを浮かべた。

「ようやく笑ったか。お前さんはそのほうが可愛い」

鴉の不意打ちに、私の顔が熱くなる。

今が夕暮れでよかった。赤い色は見えにくいはずだから。

そのまま、私と鴉は七色雲を見つめ続けた。夜が次第に色を増す。

「なあ、お前さん」と鴉が呼ぶ。

「何？」と私も短く返した。

「色んなものがあるだろう。世界には」

消えかける七色雲を見つめながら、鴉は囁いた。

「俺がお前さんに教えたもの。汚いもの、奇妙なもの、どこにであるもの、くだらないもの、そして綺麗なもの。全部ぐちゃぐちゃに混じった鍋みたいの世界。」

俺はそれを何十万年も見てきた」

「……」

「まだまだいっぱいある。お前さんに伝えられることは、まだまだいっぱいあるんだ」

私は鴉の横顔を見た。闇の濃くなった世界に溶け込み、見づらくなつた鴉の姿は、どこか強い孤独を感じさせる。

案山子である私以上に。

「だから……また明日も来てやるさ」

その言葉を自らのためきで打ち消すと、鴉は勢いよく紫色の空へ飛び立った。

三本の脚が私の肩から離れる。

「あつ……」

何か言おうにも、曇しか詰まっていけない私の頭は、気の利いた台詞など浮かべることができなかった。ただ、夜空へ消え去る鴉を見つめるばかり。

飛び立つ寸前、鴉は照れていたように見えた。それは、初めて見せた鴉の本心だったのかもしれない。

私の肩に温かい寂しさが残っている。生意気で物知り顔の鴉がくれた贈り物。

私は空と、その下で流れる小川を眺めた。

日の暮れた川辺に、淡い蛍火が現れて、飛び去った鴉を惜しむように、ゆらりゆらりとスローテンポのダンスを舞い始めた

「ダンシングチェーンソー」by名無し

今日はジェシカの家でホームパーティー。ジョンはとっておきのおめかしをして耕耘機に乗り込んだ。

「今日こそはキャサリンをゲットだぜ！」

ハンドルを握る手に自然と力がこもる。ジョンの耕耘機はあぜ道を耕しながらジェシカの家に向かって出発した。

どこまでも広がる大地を進む耕耘機からタイヤが一つ取れた頃、ジョンはジェシカの家に着した。ジェシカの家の庭では、すでに大勢の人が鍬を片手に地面を穿り返している。もうすでにパーティーは始まっていた。

タイヤの取れた耕耘機で蛇行運転しながらジェシカの家の敷地を耕していたジョンの元に、パーティーの主催者であるジェシカが走って近づいてきた。

「ハイ、ジョン。今日は来てくれてありがぶぢゅび」

ジェシカはジョンの耕耘機に巻き込まれてミンチになった。肥沃な大地にジェシカの血と肉が吸い込まれていく。パーティーはいきなりクライマックスだ。

テキーラを静脈注射したようなデタラメ走行の拳句、横倒しになった耕耘機から放り出されたジョンは、キャサリンの前に頭から着地した。

「ハイ、キャサリン。機嫌はどうだい？」

「ジョン、今日は最高よ！」

キャサリンは倒れているジョンの頭に鍬を振り下ろしながら、恍惚とした表情で答えた。

ミンチが追加されて盛り上がるパーティー。いよいよダンシングチェーンソーのコーナーだ。

「さあみんな！ チェーンソーをたくさん準備してきたよ！ レッツ、ダンシン！」

ジェシカの関係者と思われる人物が、ダンプの荷台にチェーンソーを満載したままパーティ会場に突入してきた。ダンプは3人轢いて5人潰した後、転がっていたジョンの耕耘機にぶつかって横転、そのまま派手に炎上した。

パーティの客たちは歓声を上げながら炎に包まれたダンプに群がり、チェーンソーを手にとった。そこかしこからチェーンソーのエンジンが目を覚ます音がする。

炎に包まれたパーティの客が、魂の振動で唸りを上げるチェーンソーを振り上げた時、燃え盛る炎がガソリントankに引火してダンプ大爆発。チェーンソーと人間は部品と手足を撒き散らしながら宙に舞った。

「とつても……きれい」

ダンプに胴体を潰されたキャサリンが、迫り来る炎を前に血の塊と共に声を吐き出す。

血と肉を大地は飽く事無く取り込みつづけた。炎は全てを灰にして、さらに大地は肥沃になる。

来年も豊作だ。

「七色雲」by へボ

ぷかぷかぷかぷか。今日もネコは浮かんでいます。

穏やかな海。空の真ん中に太陽。雲はどこにもありません。島なんて水平線にも見えない海で、ネコは真っ青な空を眺めていました。ふと、耳に聞き慣れない声が飛込んできました。ネコは辺りを見渡します。空に渡り鳥の一群が飛んでいました。

「みゃー」

ネコは話しかけました。

「こんにちわー。どこ行くんですかー。どこから来たんですかー。ずっとずっと暇でしょうがなかったのです。」

鳥たちは、しかし返事をすることなく、すいーっと飛んでいってしまいました。ネコの声は届かなかったのです。

ネコは飛んでいく渡り鳥たちをじっと見ていました。海が少し冷たくなりました。新しい潮流に乗ったのでしょうか。ネコは海の流れるままに運ばれていきます。

ぷかぷかぷかぷか揺れる体。甘い絡みつくような眠気がネコの瞼を閉じていきます。今日もとってものかなのです。

不意に、いつかカモメの兄さんがしていた話をネコは思い出しました。晴れて適度に湿度がある日は彩雲と言う綺麗な雲が見えるという話でした。

「でな、その彩雲つてよ、七色に輝く雲なんだよ。分かるか？ 雲がよ、虹みたいに光るんだよ。ありゃ、一度見たら忘れらんないぜ。いやあいいもん見たよほんとに」

妙に熱く語っていたカモメの兄さんを思い出しました。

ネコはぼんやりと空を見上げました。

ずうっとずっと真っ青な空だけが広がっていました。

少し残念でしたが、ネコはそのまま眠ることにしました。もしかしたら明日は見られるかもしれない。明日じゃなくてもいつか見られ

るかもしれない。期待に胸を踊らせた。

海は変わらず穏やかで。

ネコは今日も浮かんでいます。

「スチューピットは囁く」byへボ

深夜。輝く月が雲に隠れ、深い深い闇が訪れる。路地を歩く人影はない。住宅地は心細くなるような静寂に包まれている。家々は眠りの中に沈んでいた。

そんな中、その家は、濃密な臭いで溢れかえっていた。足元から絡み付いてくるかのような、肌まで染み込む血の臭い。明かりが一つも点いていない家は、不快な生暖かさを有していた。

誰もが寝静まっているはずのこの時間帯に、何か動くものがあつた。それは、絶え間ない上下運動を繰り返している。下にそれが動く度に、勢いよく粘着質な物体を握り潰した時のような、くぐもつた水気を含んだ音が辺りに響く。振り上げては、響く。振り上げては、響く……。

厚い雲に覆われていた月が、その輝きを取り戻す。開いたカーテンの隙間を縫うようにして、青白い光が射し込んで来る。瞬間、狂気の笑みが浮かび上がった。

三日月形した双眸。そして、限界まで引き攣り硬直したかのうような口。真っ赤に染まった少年の顔には、相応のあどけなさなどもうどこにもない。振り上げては、響く。肉が潰れていく。

「ねえ、ママ。ぼく良い子でしょ」
疲れたのか突然手を止めた少年は、荒い呼吸を整えることもせず、跨る母へと問いかけた。もう何も映していない母の瞳。虚ろを望むばかりの瞳に、少年は問いかける。

「ねえ、ママ。ぼく良い子でしょ。ママを苦しめてた奴を倒したんだよ。ちよつと待ってて。こいつがママを苦しめてたんだ」

そう言つと、少年は母の腹部へ、準備した包丁の刃がぼろぼろになるまで繰り返し突き刺した腹部へ手を突っ込んだ。

血の海に手が潜っていく。細切れになった肝臓を掻き分け、昨晚食べたものが溢れ出した胃を退かし、消化液の黄色や黄土色に染ま

った小腸に手を浸して、それを探す。やがて純粹な笑顔が輝いた。宝物を見つけた子どものような顔で、目的のものの一部を取り出す。

「ほら、これがあいつの手だよ」

それは、最早出産を待つばかりにまで大きく成長した胎児の掌だった。胎児は少年の手によって原型を留めないまでに切り刻まれていたのだ。母の胎内に守られていたはずなのに。

「ねえ、ママ。こいつがママを苦しめてたんだよ。ぼくのママを、ぼくだけのママをずっと苦しめてたんだよ。……ぼくだけのママだったのに」

こいつが横取りしたんだ！

少年の顔は見る見る憎悪に染まっていく。怒りが、悲しみが、少年の身体を震わせている。ついには手にした掌を握り潰してしまった。鮮血が母の体内へと滴り落ちる。そこで二人は混ざり合っている。

「ね、ママ。ぼく、ママのことを思って、ママを助けたよ。もうきつと、苦しまなくても大丈夫だよ。ね、ぼく、良い子でしょ」

そう言って、少年は母の顔を両手で掴む。真っ赤に染まった両の手で己の母の顔を掴む。

「だからね、ママ。笑って。あの頃みたいに、良い子だねって笑って撫でてよ」

語りかける瞳はただ虚空を見つめるばかりで。

少年は母の口の端に包丁で切り込みを入れ始めた。小さな口が、徐々に裂けていく。欠けた包丁は、すんなりと刃を進めてはくれないようだ。少年は苦心して母の口の裂いていく。やがて作業が終わると、満足そうに微笑んだ。限界まで引き攣った笑顔が、さらに嗤う。

少年は母の腹に立ち、奇声を上げながら跳躍を始めた。何度も何度も高く舞い上がり、力の限り踏みつける。肉片が辺りに散らばっていく。血が飛沫を上げる。あの音が、先程にも増して大きく響き

渡る。

真つ赤に染まった少年は、奇声を上げながらも囁っていた。見上げる母の大きな口は、見事な三日月形をしていた。

「サンセラッチェ」byしたうち

何も持っていなかった僕に、ひとつの約束をくれたあの人は、今はもうお墓になった。

真新しい白いその石には命日と名前が一つ彫ってある。あの人の名前だ。この世でただあの人だけのものであるはずの。

『僕が死ぬときは君が死ぬときだ』

ふいに、あの人の言葉が脳裏に蘇った。

『そして君が死んだとき、君は僕になり、僕は再び命を得る』

あのときあの人は、何も持っていないと、そう親の愛情でさえも、持っていないと泣く僕にそう笑いかけた。

たった今からこれを約束としてあげるから、もうそんなに嘆く必要はないと。

涙と鼻水でぐしゃぐしゃの僕を優しく撫でてくれた。パパとママがするように、汚らしいと殴ってくれたって構わなかったのに。

あのとき、あの温かい掌は汚れずに済んだだろうか。

「でも、あなたは死んでしまったよ」

僕は墓石の名前を指先でなぞった。彫らなくて良いと言ったのに、お節介な埋葬屋の店主は勝手に彫ってしまったものだった。

「もうひと月になるのに、僕はまだ信じられない。あなたがいない現実なんて現実じゃないみたいだよ」

あの約束をくれた一週間後のことだった。

流行り病にかかって、あつという間に。僕は、何も出来なかった。

「あなたの口癖だつてもう聞けないんだ」

ことあるごとに、あの人が口にしていたあの言葉の意味は、ついに知ることはなかった。

ただ、あの言葉を言うあの人はいつもすごく楽しそうで、嬉しそう

で。それで僕も一緒に嬉しくなつて、その嬉しい気持ちにもまた嬉しくなつて、思わず涙が出てきそうになつたことだつてある。

…幸せが、現実だと信じていたから。

僕は決心して、勢いよく足を振り上げた。

そうして振り上がった足は墓石の名前を蹴りつける。でももちろん一回だけじゃ足りなくて、僕は何度も何度もあの人の名前を蹴りつけた。

蹴つて蹴つて蹴つて、蹴り続けて。

高かつた太陽が暮れ始めたころ、僕はようやく足を止めた。

白い墓石はもうぼろぼろで、名前を部分は崩れ落ち、何が書いてあったのかさえ分からなくなっていた。

代わりに、僕はポケットからコインを一枚取り出して、崩れた石のところにながりがりと言つた名前を掘り込む。僕の名前だ。

『そして君が死んだとき、君は僕になり、僕は再び命を得る』

僕は足元に転がしていたリュックを背負つた。時計を見る。汽車の時間まであと少ししかない。

多分、もうこの街に戻つてくることは無いと思う。

僕は最後に一度だけ墓石を見つめて、心からの笑顔であの人の口癖を叫んだ。

「サンングラッチェ！」

僕はあなたとして生きていくよ。

「例えば毎朝のコーヒーのような」byひねもす

「結局……あなたはあたしのことどう思ってるわけ？ 言っとくけど、あたしはあなたのお手伝いさんでも何でもないんだからね」

私は思い切ってタカマサにそう言った。幼馴染みのよしみでタカマサのワガママに付き合ってきたけど、もう我慢できない。やれ、生徒会の仕事の手伝いだの、購買行くから付いてこいだの。青春執行妨害で訴えてやるうか。

「そつだなあ……」

タカマサは首を傾げて考えこむような仕草をした。

「毎朝飲むコーヒーみたいだな、忍は」

「は？」

「たった一口だっていい。朝コーヒーを飲むと俺はその日の間ずっと……」

タカマサはそこでいったん言葉を切って、じつと私の方を見た。

「気分が悪くなる」

私はにつこりと笑った。

「……いつぺん、死んでミル？」

「地獄少女!？」

地獄に流してやるうか。

「まあ待て、人の話は最後まで。俺は甘党で苦いものが好きじゃないんだ。コーヒーなんざたとえ砂糖を7杯入れても飲む気はしない。だから俺は毎朝牛乳を飲む」

「そりゃ飲む気しないでしょうよ。7杯も入れたら甘すぎの上にコップの底ジャリジャリじゃない」

「しかしだ忍、聞いてくれ」

タカマサは目を伏せて、しみじみと呟いた。

「I have a dream……」

「キング牧師に謝れええええ」

私の声を見殺して、タカマサはふっとため息をつく。

「いつか無糖でコーヒーを飲んでみたいんだ。それも毎朝」

「なんでよ」

「なんとなくカツコいーじゃん？」

「一生牛乳飲んでろ。」

「まああれだ。憧れってやつだな。毎朝飲むコーヒーは。俺にとつての忍もそんな感じ」

「……」

ハッ。いかんいかん。こういう甘い言葉で惑わしてくるのがタカマサの手口だ。

「無糖コーヒーなんて百万年早くてよっ」

しまった、口調が変になった。動揺するな自分。

「いや、俺は日々進化をとげている。無糖コーヒーが飲める日もそう遠くはないだろう」

「進化って、例えばどんな？」

「うん、牛乳は無糖で飲めるようになった」

牛乳に砂糖……えっ？

「月夜の下でラツタッタ」by へボ

街の灯りはどうしてこんなに寂しくなるんだろう。十月の夜風はどうしてこんなにも冷たいんだろう。

暗い暗い街外れの高台で、ひとり手摺にもたれかかりながら、私はそんなことを考えていた。答えなど、もうとっくにしているのに、思考は同じ軌道をぐるぐる回る。広がる夜景はとても綺麗だった。

夜風がスカートから覗いた足を撫でていく。首筋をなぞっていく。寒さに思わず首を竦めた。マフラーを持って来れば良かった。こんな場所、来なければよかった。少し後悔した。

空には三日月が懸っていた。

さつきまで一人でフルコースを食べていた私。出てきたフランス料理は片っ端から平らげていった。ワインは二本空けた。

素敵な記念日になるはずだった一日は、別れを告げられた不幸な一日となってしまっていた。朗らかに微笑んで、共に晚餐をするはずだったあいつの向かい側の席には、温もりさえ宿らなかった。

予約したレストランで、一人料理を貪っていた私。不思議と悲しみは込み上げてこなかった。黙々と料理を口に運んでいた。

一体いくらしたのだろう。払った料金は覚えていない。支払いはカードで済ませた。最中、背中に他の客たちの好奇心な視線を感じた。振り向いたが、誰も私を見てはいなかった。声をかけられる。作業を終えた従業員は笑顔でカードを返してくれた。何だか腹が立った。

見世物じゃないんだ。馬鹿にすんな。

奪うようにしてカードを従業員から受け取り、店の出口へと向かう。真っ黒なガラスに私が映った。少し気合を入れてしまった服やアクセサリーが、馬鹿馬鹿しかった。

その後、どうやってここまで来たのかは分からない。気がつけば、私はこの高台にいた。かつて二人愛を誓ったこの高台に。

私は今、あの時の景色を見ている。ひとりぼっちで眺めている。あいつは、何をしているのだろう。光の街を見ながらふと考える。テレビを見ているのだろうか。友人の所へ行っているのだろうか。もしかしたら、もういる新しい女の所に身を寄せているのかもしれない。

よく分からない。

でも、何となくだけれど、それらは違う気がする。そんなこと、あいつはしない。出来るわけがない。そう思う。

あいつは今、ビールを飲んでいるだろう。暗い寒いアパートで、一人壁にもたれかかってビールを飲んでいるのだ。多分、それが一番正しい。別れた私に想いをはせては、ちびちびと缶ビールを傾けているのだ。

もし本当にそうだとしたら、あいつがそんなことをしているのだとしたら。

私は堪らず手摺の上に組んだ腕に顔を埋めた。

あいつ、笑ってる。寒さに震える私を想像して笑ってる。噴き出しそうになった。何だか無償に可笑しいのだ。

今日まで、どうしようもない人間同士が馬鹿みたいに愛を語らっていたことが。いつだっ自分が傷つくことを恐れて、欺き付き合っていた二人が別れたことが。そしてようやく、別れた今更になっで本心で向き合っていることが。

この上なく、くだらなくて馬鹿馬鹿しい。

自虐的な笑いが次第に音となって溢れ出していく。月だけが淡く青く照らす広場に笑い声が響いてしまう。

ああ、何てくだらない！ 何てつまらない毎日だったんだろう！ 私は手摺から崩れ落ちるようにして蹲ってしまった。膝に力が入らなくなってしまったのだ。腹を抱えて笑い続ける声は、広場に虚しくこだましていた。

誰もいない、光もほとんどない広場。望む夜景が美しい広場。私はひとりここにいる。

笑い疲れた。手は自然と目尻を拭っていた。指先に付いた涙は、寒さをより一層身に染みさせた。

息を整え立ち上がる。輝く街を見下ろす。もう笑うことはない。眠らないこの街のどこかにあいつがいる。私と同じ、くだらない人間がいる。

二人共に過ごしてきた街は、こんなに大きく、明るく、綺麗だったのに。この景色を二人で見るとは、もう二度とない。

風が吹く。随分と数の減った虫の鳴き声が細々と聞こえてくる。季節は絶えず巡っている。小さな出来事も、大きな出来事も、全部包み込んで巡っているのだ。

何だか無性に回りたくなってきた。誰もいないこの広場。今夜ぐらい主役を演じてもいいんじゃないだろうか。きつといいよね。

くるくるくるくる回りながら私は広場の中心へと移動していく。小さく歌を口ずさみながら。手にした荷物を遠心力に任せて放り捨てて、回り始めた。

ラッタッタラッタッタ　お馬鹿な私

ラッタッタラッタッタ　今宵はひとり

ラッタリララッタリラ　月夜の下で

ラッタリララッタリラ　くるくる回る

「例えば毎朝のコーヒーのような」boyz

僕の目の前で、彼女はテーブルについた薄い傷を見つめていた。

（どうしてあなたは私を見てくれないの。私がるで月が雲に隠されたように消えたとしても、あなたはきつと気づかないでしょう）

そう言った彼女の瞳は、やはり僕を見ることもなく、机の上に据えられたままだった。

（何を言っている。初めて僕らが出会ったころのことを忘れたのか。君は僕にとつての太陽だ。君が消えてしまえば、僕は闇に包まれるさ）

そんな言葉を吐き出しながら、僕の目は彼女の背後に張られた、カレンダーを見つめていた。

初めて彼女と出会ったのは、二人がまだ中学に通っていたころだ。それから僕たちは、何時も同じ道を歩いてきた。

出会ってすぐに、僕たちは惹かれあい、同じ高校に進み、同じ大学に学んだ。

初めてキスをしたのは、中学二年、夏祭りの夜。それからもう、14年が過ぎた。そして、初めて肌を交わしてから、十年が経った。大学を卒業し、別々に就職を決めたときは、僕たちはひとつのベッドを共有していた。それからもう、六年が過ぎた。同じベッドで眠ることがなくなったとき、僕たちは同じ苗字を共有していた。それから二年が経った。

二人の間から、一人の新しい命が芽生え、今、隣の部屋で安らかな寝息を立てている。

もし彼女が太陽だとしても、たとえ絶え間なく僕の目の前にあったとしても。それはまるで極北の白夜のように熱を持たない。

それは、いけないことなのだろうか……

だけど彼女は小さく首を振った。

(僕と出会ったことを後悔しているのか。僕と共にいることを悔やんでいるのか)

(そうじゃない。私は今まであなたとずっと一緒にいた。後悔する暇はなかった。これからもきつと悔やむことはない。でも)

彼女は初めて顔を上げた。そして、すこしだけずれた僕の視線にまるで気づかないように、僕の目を睨みつけた。

(だけど……)

ずれたままの僕の視線の先には、目尻にたまった涙が、そっと、あった。それはわずかに揺らぎながら、しかし彼女の長いまつげにしがみつき、頬を伝おうとはしなかった。

そのとき、夜が壁を通して忍び込んでいるこの部屋に、太陽のように明るい泣き声が響く。

「たいへん」

彼女はそそくさと顔をそらし、隣の部屋に向かう。泣き声に惹かれるように、僕も彼女に続いた。

薄暗いその部屋に置かれたベビーベッドの中で、僕たちの子供が、まるで園児の描く太陽のように顔を赤く染めて泣いていた。

どうしたの。そう声をかけながら、彼女が涙に濡れた赤子の頬をぬぐう。小さな手が、彼女の小指をつかむ。

柔らかな赤子の頬を、この子のものではない涙が落ちて、再び濡らす。それが無性に悔しくて、僕は彼女の肩を抱き、そっと頬を寄せた。

僕の頬も、彼女の涙で濡れる。それはまるで氷のように冷たい。

「僕たちは、出会ったところの僕たちではないのかもしれない。けどそれはいけないことなのだろうか。出逢ったところの僕たちには、この子はいなかった。だけど、僕たちの未来に、この子はいる」

僕は彼女の頬をなで、こちらを向かせ、そしてキスをした。初めてのキスをしたときは違い、視線を合わせないまま。

何時しか泣きやんだ子が、つぶらな瞳に涙をたたえたまま、僕たちを見ていた。

「あなたにとって、私はもう毎朝のコーヒーのようなものなのね。無ければさみしい、ただそれだけの存在」

「そうじゃない」

何時以来だろうか、僕は彼女の瞳の中心を見つめた。そこには、初めて逢ったころの僕とは似つかない僕が映っていた。

「例えば毎朝のコーヒーのように、君がいるから明日が始まるんだ。これからこの子は育ち、僕たちが出会ったように誰かと出会い、僕たちが愛し合ったように誰かを愛し、僕たちがそうであるように、誰かと未来を築くだろう。」

僕たちは変わったかも知れない。僕たちはこれからも変わるかもしれない。だけど、絶対に変わらないものがある。あの花火の下での約束を、覚えているか」

それは、僕たちが始めてキスをした、二人の未来がひとつに重なった夜。彼女は僕の肩に額を預け、そしてうなずいた。

(ずっと一緒だよ)(ずっと?)(そう、ずっと)

夜が明けると、きっと彼女は僕のためにコーヒーを入れてくれる。それを飲んで、僕は出かける。変わらない毎日、それでも少しずつ変わってゆく。だけど僕の隣には、いつも彼女がいるだろう。

そう、ずっと

(fin)

「空のインク」by名無し

昔々、ずっと昔。

神様が天地創造にいそしんでいた頃の話。

「ふむ、この色はどうしようかの」

神様は真っ白な空を見ながら考えました。

世界を覆うこの大空にふさわしい色は何か。

白いままでは味気ない。

赤は何か物騒だ。

茶色は無理だ。

黄色……悪くない。

「……塗りながら考えるか」

神様は、天使達に絵の具をいろいろ持ってこさせました。

天使達は小さな体に似つかわしくない大きな缶を持って神様の下

へ急ぎます。

「あっ」

一人の天使がバランスを崩して、とっさに持っていた缶を放り投

げてしまいました。

「うわっ」

放り投げられた拍子に缶の中身があたりにぶちまけられ、神様や

天使や空が青く染まりました。

「こらっ、なにをしとるか」

神様が天使をしかります。天使は小さな体で何度も頭を下げ謝

りました。

「しかし……よく見るとこれはこれでいい物じゃの」

一面の青の中、神様や天使がいた場所が所々白いままの空を見て、神様が呟きました。

「よし、空はこれで行こう。怪我の功名という奴じゃな」

謝っていた天使の顔がぱあつと明るくなりました。

「しかし、皆に迷惑をかけた事は確かじゃ……わかっておるな？」

天使はかわいい顔を赤く染めると、ふわっとした服のすそを掴んで、ゆっくりと上に持ち上げました。

「ほう、この淫乱め、もう

(省略されました……続きを読むにはここをクリックしてください)

「ジャックの贈り物」by ジル

彼女は、とても不幸せだった。もし彼女が、私は不幸だと言えば、ほとんどの者が頷くだろう。

彼女より幸せな者たちは、そういう彼女を哀れんで、己の幸せをかみ締め、そして彼女と同じ境遇の女たちは、自分も不幸だと思っているから、彼女が幸せであるとは認めない。

そんな彼女にも、この数週間、すこしだけ幸せが訪れていた。

あ、すいません。大丈夫ですか？

「仕事」に向かう途中、細い路地から通りに出たとき、出会い頭にぶつかった一人の男。

夫という名の寄生虫に殴られた顔をばさばさのとうもろこし色の髪で隠しながら、彼女は首を振る。そして、あわてて飛び散らかった化粧道具や煙草を拾い集める。

ちびたリップに伸ばした手が、暖かい男のそれと触れた。

あ

本当にごめん。

大丈夫ですから。

男の、謝意を絶妙に混ぜ込んだ微笑を間近に見て、あわてて手を引く。十月もなかば、肌寒い空を恨めしく思っていたことも忘れ、早い日暮れに感謝する。

夫とは、いや、自分たちとは明らかに別の世界に住む男。身だしなみを清潔に整えて、微笑んだ口元には白い歯が光る。こんな人に、殴られた痣なんか見られたくない。

大急ぎで小物を拾い集め、口を開けっ放しにしていたまがい物のコーチのバッグに放り込み、そそくさとその場を立ち去った。

まるで少女マンガのような出会いが、まさか自分のような人間に訪れるはずがない。それでもそんなことをちらりと思つ自分に、すこしほほを染めながら。

だけど、それで終わりではなかった。

彼女は、毎日同じ時間に古いアパートを出る。男も、同じ時間に帰途につくのだろうか。あの日ぶつかったあの曲がり角で、二人は毎日顔を合わせるようになった。

いつもうつむいて歩く彼女に気がつくのはいつも男のほう。決してどこかに寄るわけでもなく、長話をするわけでもない。ほんの二言三言を交わすだけ。ただそれだけを、彼女は何時しか楽しみに思うようになっていた。

彼がどんな仕事をし、どんな生活を送っているのか、彼女にはわからない。それでもよかった。彼は、彼女のヘドロのような毎日におとずれた、ほんの小さな灯火。それでよかった。

だけど。

どうしたんだ、その傷は？

彼のクツを視界に納めたその瞬間走り出した彼女の手を、彼の形のいい手が掴み取る。

なんでもないので。お願い。離して。

誰から聞いたのか、それとも自分の目で見たのか。昨夜遅く、いや、今日の明け方、仕事を終えて帰った彼女を待ち受けていたのは、夫の詰問と、いつもよりも酷い折檻だった。

(あの男はなんだ) (いつからだ) (金にならねえ男となにいちやついてやがる) (お前は俺に金を持つてくることだけを考えてる) もう、自分はここから抜け出せない。夫に何もかも吸い尽くされ、クスリでぼろぼろになった身体で、それでも地虫のように生きるしかない。

男とのわずかなふれあいに見た明るい世界は、しょせん儚い夢に過ぎない。

もうすぐハロウィンだな。知ってるかい？ジャック・オ・ランタン。

そんな彼女の思いを知ってか、男は彼女にそう聞く。

知ってる。かぼちゃのお化け。

ジャック・オ・ランタン。別名、ウィル・オ・ウィスプ。卑劣な悪人ウィルの魂が、地獄の門さえもくぐらせてもらえずに、地獄の種火だけを携えてさ迷っていると言われている。

彼女の戸惑いを置き去りにして、男は話を続ける。

君を悲しませる男は、ウィルのように報いを受けるさ。天国の門をくぐるべき君とは違う。

あなたは、クリスチャンなの？

敬虔な信者ってわけではないけどね。ハロウィンの夜を楽しみにしててくれ。きつと、小さな贈り物が君へと届く。

駅裏のホテル街。その周辺のうらぶれた小路。そこが彼女の仕事場だった。晩秋の寒空に、大きく肩を見せたドレスを着て、道行く男の袖を引く。

だけど、彼女は今日、植え込みの端に身体を預けて、声もかけずに煙草を喫っていた。

あの日から、彼は姿を見せなくなった。もう会わない。そう決心したはずなのに、何時しか足はあの曲がり角に向かい、彼を探すためだけに上げた顔を淋しく伏せて、この場へと向かう。

そして今日、十月三十一日。ハロウィン。今日も男は姿を現さなかった。

深いため息の形に煙を吐き出した彼女は、まだ長い煙草をアスファルトに落とし、ぼんやりとしたオレンジの火を、やはりぼんやりと見つめる。

自分は何を期待していたのだろう。それがどんなささやかなものであっても、必ず裏切られる。それは、これまでの人生で嫌という

ほど思い知っていたはずなのに。

長い髪を一度揺らして男の面影を振り切り、客を探そうと身体を起こす。そのとき。

トリック、オア、トリート。

え？

振り向いた彼女の目の前に、あの男が笑顔を浮かべて立っていた。彼女は哀れなほどに狼狽する。こんな、道端で男を誘っているような自分の姿を見られなくなかった。

どうしてこんなところに……

言っただじゃないか。ハロウインの夜、贈り物を上げるって。

何よ、哀れみをくれるって言うの？それともあたしを買ってくれる！？

そうじゃない。僕は、君に幸せになつて欲しいんだ。

男の冷たい手が、裸の肩に触れる。火箸を押し付けられたように、彼女がびくりと身体を震わせる。

さあ、おいで。

肩を抱かれたまま、半ば放心したままの彼女は、男の言うがまま歩く。薄暗いこのあたりの、さらに暗い細い路地。

だけど、彼女にはそれが都合よかった。涙で崩れた化粧を、男に見られることがないから。

そしてたどり着いたのは、ネオンの明かりも、街灯もない、街中につぼつかりと開いた穴のような、闇の片隅。

君が売春をしているのは知っていた。

そんな。

男の言葉は、女を絶望へと追いやる。しかし、次の言葉を聞いて、涙に濡れたままの顔に、希望があふれる。

だけど、僕は君の心が清らかであることも知っている。主は決して、君のような人をお見捨てにならない。君はウィルとは違う。必ず天国の門をくぐることができる。

ああ。そう女は歎声をもらした。それは、彼女が求めていた言葉

だったのかもしれない。この地獄のような暮らしから救ってくれる、
わずかな希望。

さあ、約束の贈り物だよ。

男の右手の中で、何かがほんのわずかな光をはじいて煌めいた。

君の魂が、穢れた体から解き放たれ、主の御許で清められんこ
とを。

そう、その瞬間、彼女は確かに幸せだったのだ。

『切り裂きジャック、二十一世紀の日本でよみがえる』

新聞の紙面をそんな見出しが飾ったのは、その二日後のことだっ
た。

(f i n)

「捻れた小指」byジル

ずっと一緒だよ

ずっと？

そう、ずっと

指きりげんまん嘔吐いたら

「いい加減にしるよっ！」

喫茶店に入るなり、俺はテーブルに掌を強く叩きつけて、唯を怒鳴りつけた。俺たちより先に待っていた唯の薄い肩が、びくりと縮こまる。

俺の隣に立つ祥子が、フン、と鼻を鳴らす。

周囲の客の視線が集まっているのに気づいて、俺たちは唯の向かいの席に腰を下ろして、声をひそめる。

「だって、晋ちゃん、約束したじゃない……」

唯は血色の悪い顔をうつむけたまま、上目遣いに俺たちを見た。

「なんだよ。約束って」

祥子の険しい視線を頬に感じて、俺はそっけなく聞き返す。

「わ、忘れちゃったの？ 四年生のときにした、指きり……」

俺は、せっかく決めた髪をガシガシとかきむしった。ワックスが指にねっとり絡みつく。

唯の言葉に、俺はようやくそれを思い出していた。そう、唯は、俺がその小学校に転校したばかりのころ、最初の、そして唯一の友達だった。

家庭の事情、ぶつちやけて言えば両親の不仲とその末の離婚というごたごたですっかりひねくれていた俺に、席が隣だというだけでいろいろ親切にしてくれた。

親の仲たがいで、逆に大人の色恋に敏感になっていた俺は、確かにそんな結いに惹かれていたのかもしれない。

「四年生って、いつの話だよっ！ ガキのころのたわ言を今頃持ち出すなっ！」

だけど、おとなしくて、しかしとても真摯な瞳をしていた少女だった唯は今、退屈で根暗な、何の魅力もない女に成長して俺の目の前にいる。

「でも……でも、私はずっと忘れなかったもの。ずっと、晋ちゃんのこと……」

「だからってねえ、あんた。こんなストーカーまがいなことをしていい理由にはならないでしょう」

祥子が、持ってきたコンビニ袋の中から、封を乱暴に破られた手紙の束を取り出し、それをテーブルの上にはさりど放り投げる。

唯の顔が、驚いたように俺を見た。

「こ、この人も読んだの？」

「あたりまえじゃない。あたしは晋一の彼女なんだから」

俺の代わりに祥子が答えたとなん、唯の顔がくしゃりと歪んだ。

「酷い……」

幸薄そうな唯の頬を、涙が一筋流れる。だけど俺は、同情する気にはなれなかった。

祥子と俺が付き合いだしてから、これらの手紙が届くようになるまで、唯からのメールが一日何十本となく送られてきていたのだ。

何をいつても、無視を続けても止まないそれらに業を煮やした俺がメアドを変えたとなん、これだ。

「ねえ、晋ちゃん……」

「やめてよ。幼馴染かなんたか知らないけど、晋一のことを馴れ馴れしく呼ばないで」

唯の言葉を、祥子が遮る。しかし唯は、かまわずに続ける。

「晋ちゃん、あの約束は、嘘だったの……？」

俺は一瞬言葉を失った。そう、そのとき、俺は確かに本気だったはずだ。ずっと、唯と一緒にいたいと、そう思っていたはずだ。

だけど、そんな思いは祥子のギリリという歯軋りの音にかき消された。

「ああ、大嘘だよ。頼むからもう、俺たちに付きまとわないでくれ、いいな」

帰るぞ、俺はそう祥子に声をかけて席を立った。がたりと音を立てて祥子も立ち上がり、店の出口に向かう。その後を追いながら、これから祥子の機嫌をどうやって取るうか、それだけで俺の頭の中は一杯だった。

しかし

突然、客の一人が甲高い悲鳴を上げた。なんだ？ 俺はあわてて振り返る。一人の女が立ち上がって、何かを指差していた。その先には、唯がいた。

唯は右手にナイフを持って、その刃を自分の小指に当てていた。

「ばっ……！ 何してやがるっ！」

同じく振り向いたまま凍りついている祥子をその場に残し、俺は急いで唯に駆け寄る。冗談じゃない。これ以上こいつのために厄介ごとに巻き込まれるのはごめんだ。

しかし唯は蒼白な顔に笑みさえ浮かべて、俺を見上げた。

「だって、ずっと一緒って約束を守れなかったから。指を切らないと……」

それと同時に、唯の右手に力がさらに入った。そして、カッン、という乾いた音とともに、細い小指がテーブルの上を転がった。店内を、さらに悲鳴が埋め尽くす。

俺は動転した。あわててその小指を拾い上げると唯の左手をつかみ、傷口に押し当てる。切つてすぐなら指はつながる。漫画化何かで読んだその知識だけが、俺を動かしていた。

だから、その後唯が言った言葉も、祥子の悲鳴も、聞こえていなかった。ただ、鮮血に染まった唯の左の小指を必死に押さえつけていた。

「晋ちゃんも、嘘を吐いたんだから」

俺ののどに、冷たい痛みがもぐりこんでも、妙に拭れた唯の小指を、元に戻そうと……

晋ちゃんは、ナイフ一本で赦してあげる……

「ハリセンボン、飲ーます」

(f i n)

「ハルカカナタ」 by へボ

夜空にまん丸の月。外はかなり寒い。私はひとりベランダに出て毛布にくるまりお月見中。手にしたマグカップから湯気を立ち上らせるコーヒーは、何だかとても温かくて。広い街で、暗い夜にひとりぼっちの私にとっては、涙が出そうになるくらい優しくかった。

今朝、陽二は死んだ。遠い遠い異国の地で、パニックに陥る群衆を誘導していた時に、凶弾に倒れたのだそうだ。ただ現地で医療活動をしていただけなのに。傷ついた人々を、少しでも救おうと誇り高く生きていたというのに。突然始まった市街戦で、あっけなく殺されてしまった。大切な約束を果たさないままに。

その事実を、私は今しがたのニュースで知った。

午後六時。金色の月が輝き、空に夕食の香りが漂い始める時間帯。家路を急ぐ人々が雑踏を掻き分け、家族の下へ向かっていた頃、私はテレビを見ていた。特に何をするわけでもなく、何か差し迫った状況にあったわけでもない。平凡すぎる日常を過ごしていた。本当に平凡で、平凡すぎて今もどこかで戦争が続いているとか、今がとつても平和なんだとか、そんな当たり前のことを忘れてしまつていくにつまらない時を過ごしていた。その報道がされるまでは。

コーヒーを一口すする。熱くて苦い。口の中いっぱい広がって、喉を焼いていく。

ベランダに出てくる前、全ての電化製品の電源を落とした。部屋の明かりも、冷蔵庫も、テレビも。全部コンセントを引っこ抜いて、ブレーカーを上げてしまった。きつと今日はとつても経済的な一日になるんだろうな。ぼんやりとそんなことを考えた。

例えば、この街においても、今こうして見上げている夜空を、他

の誰かが見上げているのかもしれない。電車の中から、ホテルの窓から、寒い寒い公園の片隅から。みんな見上げているのかもしれない。そして、どこかでは誰かが人を傷つけ、傷つき合っているのだらう。

そんな当たり前のこと。誰にでも、同じ空、繋がっている景色があること。そのことを長らく忘れていたような気がする。

陽二は苦しまずに死ねたかな。やっぱり、悔しいって思ったのかな。もっと生きたいって。どうして、どうして、どうしてって思ったのかな。

涙を流したのかもしれない。

でも、死ぬなんて当たり前で。誰にだって平等に待っていて、いくら悔やんだって、どうせいつかは訪れることなんだって。そんなこと、分かっている。陽二はそれが一番近くに感じられる場所にいたんだから。いつかは誰もがこの広い空に消えていく。ただそれが早いか遅いかの違いだけなんだって。そんなこと分かっている。

分かっているけど、それを素直に納得することが出来るのだらうか。夜風が吹く。冷たい空気が染み込んでくる。

砂糖をもっと入れたらよかった。苦いコーヒーは、やっぱり陽二の舌にしか合わないんだ。薬指の指輪が、月明かりに煌めく。伝う涙は、いつか雨になるのだらう。

「猫の帰る所」 by ジル

吾輩は猫である。などとどうやら有名ならしい猫のまねをしてはみたが、もちろん名前はある。すこし暗めの茶トラの毛皮なのにもかかわらず、ミケという名前にはすこし言いたいこともあるが。当然自分のことを、我輩などと称したりもしない。

俺が住処に定めたこの家には、俺のほか三人の人間が住んでいる。父さんと、母さんと、美樹だ。俺の明晰な記憶によれば、姿は同じ人間のようでも、父さん母さんの二人と美樹は、おそらく別の生き物なのだろうと思う。

なぜなら、俺にとつてねこじやらしが何よりも魅力的な獲物だったところから、美樹だけが倍ほどの大きさに成長しているからだ。もう幾度か季節がめぐれば、この家は美樹が住むには狭くなりすぎるのではないか。

そういえば、父さん母さんは美樹に向かって、何時まで家にいるのか、誰かいい人はいないのかとことあるごとに口にする。つまり、この家の屋根を破るほど大きくなる前に出て行ってほしいと、そういうことなのだろう。

もちろん俺も、せっかく居心地のよいこの家が壊れてしまうのは非常に困ることなのではあるが、それでも、階段を上がって右側の美樹が家にいるときに大半をそこで過ごす部屋の、ちゃぶ台の上に置かれたパソコンとか言う箱の前にある座布団の上に座る美樹のひざの上は、俺がいちばんくつろげる場所であるのだから、俺は神様とやらにこれ以上美樹の体が大きくならぬよう、いつも祈っていた。それが天に通じたのかどうかは知らないが、それでも美樹はもうずいぶん長い間大きくなっておらぬようだ。だが、父さん母さんと美樹との言い争いがいまだ続いているのを見ると、油断はできぬ。俺も朝夕昼寝三食前後の祈りは続けなければなるまい。

どうも世間では、猫は猫好きの人間には近づかぬというのが定説のようだ。しかしそれは、世に言う猫好きどもが、俺たち猫のことを解っておらぬせいなのだ。猫好きを称する人間どもは、猫は孤独を好むからいいなどと口では言いながら、べたべたとのどを下を掻きたがる。俺たちは別にいつも一匹でいることが好きなのではないし、かゆくもないのどを掻かれたからといって、いつものどをぐるぐると鳴らさねばならない義理もない。俺たちはいたい場所についてかゆいときにのどを掻く、それだけなのだ。それを美樹はちゃんとわかっていて、俺が暖かい美樹のひざの上で眠りたいときに、そつとひざを開いてくれ、耳の裏を掻いて欲しいときに掻いてくれる。あたしは夕子だから、ネコの気持ちがかかるのよね、などと言いなから背中をなでてくれるときは、後ろ足の間がむずむずするほどだ。誤解の無いように言うておくが、俺は去勢されているとはいえ、れつきとしたオスである。レズビアンだの百合だのという趣味は理解しがたい。それでも、美樹の手の気持ちよさが、彼女の嗜好のおかげなのであれば、それもまあ、悪くはないかなと思う。母さんのように化粧とかいうものの匂いをぶんとさせていないのもいい。できるなれば、このままずっとこの家に置いてやりたいくらいである。しかしそれではこの家が……まあいい。明日のことに思い煩うのは、猫らしくない。

だが、明日とは、今日を生き抜いたものだけに与えられる特典であるのだ。それはもちろん俺の前に現れては消えていく、数多の野良たちを見ていればよくわかる。しかし、人間たちもそうであるとは、そのときまで俺には思いもよらないことだったのだ。

ある日、美樹から嫌な匂いがした。いや、匂いとは違つかもしれない。ひげのつけ根を冷たく凍らせるような、そんな気配。

そのとき俺は、ベッドの上の美樹の足元で眠っていた。美樹は父さんや母さんとは違って寝相がいいから、コタツの中が暗くなり、そして冷たくなると、俺は必ず美樹のベッドにもぐりこみ、そのま

ま朝まで眠るのが常だった。そして、美樹よりも先に置きだして、朝の散歩に出かけるのだが。

深い夢に遊んでいた俺をたたき起こしたのは、苦しげにもがく美樹の足とうめき声、そして、真夏の、雨上がりの後の直射日光のよな、じめりとした熱気だった。

何が起きているのかわけもわからぬまま、思わずまるで子猫のころのようにみゃうみゃうと鳴く俺に、美樹はうつすらと目を開き、そしてゆっくりと手を伸ばしかけて、大丈夫だよというように微笑を浮かべようとし、そして、その手で布団を握り締めて再び苦しみ始める。その尋常でない様子に、俺はようやくこの家にいるほかの人間のことを思い出し、無我夢中で部屋を飛び出して階段を駆け下りた。

父さん母さんが眠っている部屋のドアにつめを立て、声を振り絞って、にやあにやあと鳴き叫ぶ。ドアの向こうからもぞもぞと布団から這い出す気配がしてやっとのことでドアが開く。のぞいた母さんの足に頭突きをひとつかましてから、踵を返し階段を駆け上る。もう一度早く来いと一声鳴いてから、美樹の部屋へと駆け戻る。そこでようやく様子がおかしいのに気がついたのか、母さんの足音が急にせわしくなり、俺に続いて部屋へと入る。

美樹の名を呼ぶ声、父さんを呼ぶ声。その後どうなったのか、俺は知らない。しばらくして、家の外にうるさい音を立てる何かかやってきて、知らない人間が家の中に進入してきたから、俺は心を残しながらも外へと逃げ出していたのだ。

そして、その日を境に、美樹がいなくなった。その日を境に、家の中が急に寒々しくなった。窓の外は秋から冬へと移ろうその間際で、冬毛に生え変わった俺の毛皮を通して、冷たい空気が染み入ってくる、そんな季節ではあったのだけれども。

あれほど、美樹が家を出て行くことを願っていたはずの父さんが、美樹がいなくなったことを喜ぶでもなく、ため息をつく日が続いた。いつも家にいた母さんが、一日中家を空けるようになった。それま

で忘れられたことがない俺の食い物も、催促をしなければ出してくれなくなった。いつも明るく暖かだった台所のコタツにも、火が入られることがなくなった。冬はますます厳しさを増し、隣近所の家窓には、色とりどりの電飾が飾られ、だけどこの家だけは、そんな世界からただ一軒だけが取り残され……

この冬初めての、ごみのような雪がゆらゆらと降るそんな日に、美樹は帰ってきた。

一階のいちばん広い部屋の、白い布団に寝かされた美樹からは、あの日感じた匂いが、むせ返るほどに漂っていた。父さんと母さんが美樹のそばを離れたとき、俺は恐る恐る美樹に近づいた。硬く目を閉じたままの顔に鼻面を寄せ、彼女の頬にそっと押し当ててみた。それは冷たく、そして硬かった。

ああ、そのとき、俺には解ってしまった。美樹の指がもう俺のものを掻いてくれることはない。美樹の手が、俺の背をなでてくれることはない。美樹のひざが、俺を乗せて緩やかに揺れることはもう、ないと……

俺はその場を離れて、階段を上る。そして、美樹がいつもいた部屋へと入る。そこは、母さんの手で毎日掃除をされてはいたけれど、それでも、美樹がいた頃のまま、そこにあった。美樹がいつも眠っていたベッド。美樹がいつも座っていた、ちゃぶ台の前の座布団。いつの間にか、雪が止んでいた。雲の隙間から、冬の日差しが座布団の上に、小さな陽だまりを作っていた。俺は暖かなその中に入り、そして身体を丸めた。座布団からは、まだ、美樹の匂いがした。太陽の光が、まるで美樹の手のように、俺の背中をなでてくれた。

俺は夢の中で、美樹のひざの上で、やっぱり眠っていた。

猫は人につかずに家につくと、人間たちはいう。それは違う。大好きな人がいる家だから、俺はこの家に帰ってくる。たとえその人に、夢の中でしか会えなくなったとしても。

(nif)

「猫の帰る所」 by へボ

晩秋の快晴は、厚着をすべきか悩まなければならぬからあんまり好きじゃない。それも、悩んだ拳句の服装は、大抵裏目に出てしまうから厄介なのだ。人間たる生活を送るための最低条件、衣食住の充実は、やっぱり大切なんだとしみじみ思う。ろくに服なんか揃えずに、突発的に家を飛び出したもんだから、そのことが余計に身に染みる。こんなに晴れてるのに……とつても寒い！

中天の太陽をにらみつける。俗に言う家出少女となつて満三日目。放浪生活は佳境を迎えている。

真昼の公園と言うものは、こう、もつと昼食を楽しむ人たちなどでごった返しているもんだと創造していた。だから、閑散としたままのこの光景には少々驚いた。やはり、寒いのは皆嫌いらしい。寂しいもんじゃないか。あたしは滑り台の天辺で体操座りをしている。今頃母さんは何を思っているんだろう。誰にも言わずに家を飛び出してしまったから、あたしのこと、心配しているかもしれない。しているんだろうな。青空はどこまでも続いている。

猛烈にひとりになりたくて家を飛び出した。正体の分からない衝動に突き動かされていたのかもしれない。家族からも学校からも、友達も恋人も、みんなみんな全部取っ払ってひとりになりたかった。そして出来れば猫のように。きままに日々を過ごしたいなあなんて思っていた。

三日間、街を歩いて、人を眺めて、働く人、繋がっている人、早足に前を向き歩いていく人の波を、生きている人たちの足音を聞いてみて、あたしは次第に自分が小さくなっていくのを感じていた。そのままあたしは見えなくなってしまう。自分って何だろう、どうして自分はここにいるんだろうって考え始めてしまった。下らないうって思ってたことがじわじわ頭の中に湧き出してきた。消そうと思っても、追い払おうと思っても、脳みそから染み出してくるもの

だからどうしようもなくて。あーあ、自分って何なんだろうなんて、結局悩んでしまうわけで。

そこには答えなんてなくて、見つからず苦しむのが辛いから、みんな前を向いて、コツコツコツコツ、規律よく足音を鳴らしていくんだーとか、勝手に想像してしまう。

狭い滑り台の天辺。ちよっぴり伸びをしてみるあたしは野良猫になりたくて。自由な黒猫。好きな時に好きなこてをして、のんびり毎日を過ごしたりして。誰も縛らない。誰にも縛られない。そんな気楽で強い生活を、あたしは夢見ていたのに。

……何だか不安になる。社会から飛び出したはずなのに、社会から切り放されてしまったように感じる。そのことが、何だかとても心細くて。ひとり憂鬱になる真昼の太陽の下。所詮あたしは何の力もない一個人に過ぎないんだろっな、なんてよく分からない思考の末に、妙に納得していたりするのです。

見上げた青空には雲ひとつなくて。こんなあたしの悩みを馬鹿にしているかのように清々しくて。

本当に退屈だった。

だからだろうか。その鳴き声が聞え始めた時に、ちよっぴりわくわくした。退屈を紛らわすのに一番効果的なのは、何かしらの出来事に巻き込まれることなのだ。

周りを見渡して、少し離れた場所に泣いている白い仔猫を見つけ。鳴いているんじゃないかと、泣いている仔猫。何となくあたしには分かる。母親とはぐれてしまったのかもしれない。座り込んだまま、仔猫は泣き続ける。あーあー、よしよし。仕方がないなあ。あたしが側にいてやろう。

思い立って颯爽と滑り降りる。両足で砂場に踏ん張り、両手高く、体操選手のように綺麗に起立する。滑り台の女王と呼ばれていた過去の栄光は伊達じゃない。

さてさて、行きましようか。ぴんと張った両手を下げ、仔猫のもとへ。あたしが面倒を見てあげましよう。あら？ いつの間にか声

がしなくなっている。

目を向けると、そこには母親らしき白猫の足元で歩き回る仔猫の姿があった。どこか笑っているように見える仔猫。さっきまで座り込んで泣いていたのに。母親が来た途端、もう飛び回ったりしてる。あの不安はもうどこにもなかった。

何だよ。つまんない。折角あたしが構ってあげようと思ってたのに。ちよつと腹が立った。

瞬間、足元の興奮冷めやらない子どももの安否を確かめるように、熱心にその身体を舐めていた母猫の視線があたしを射抜いた。人に対する怒りとか、不信とか、威嚇とか、恐怖とか、そんな感情が微塵も感じられない透明な眼差し。あたしという存在を、ありのまま包んでしまうような眼差し。きつと聖人が宿す瞳には、こういった透明さが必ず秘められているんだろうなと思わされてしまう。その眼差しは、辺りを次第に母猫とあたしだけの空間にしてしまう。滑り台も、砂場も、青空も、太陽も、みんな切り取られてしまう。こいつはとてつもない奴だ。ようやくあたしはそのことに気づいた。

「私たちにだって帰る所があるから、こうしていられるのよ」

それは一体誰の声だったのか、対峙するあたしと猫、唐突に響いた声には、とても大切なことが含まれているような気がした。なぜなら、その言葉は何の抵抗もなくあたしの中の深い所に染み込んでいったから。あたしは自然とその声を、噛み締めるように呟いていた。猫がちよつぴり微笑んだ気がした。

やがて、母猫はあたしから視線を外すと、のんびり公園から出ていってしまった。仔猫はその後を忙しなく追って行った。あたしは呆然と親子の後ろ姿を眺めているだけだった。

そしてあたしは、またわけもなく滑り台の上にいる。いつかは簡単に入ることが出来た頂上も、今はもう窮屈で仕方がない。あたしはそこで体操座りをする。小さな頂上に何とか身体を納めて空を見る。

あたしは猫だ。自由と言う名の、幻の缶詰を探しに旅に出た黒猫。

何ものにも縛られることのない野良猫。そんな夢を見て、ついには果たすことが出来たと思っていた。

まあでも、結局はなりそこないの猫でしかなかったってことなんだろうな。

天頂から太陽は照りつけているのに、やっぱり寒い。猛烈に母さんの味噌汁が食べたくなった。

「鐘はいつまでも鳴り響き」byケン

ふと見上げると、雲一つない快晴の空はどこまでも広がっている。

僕はその空に手を伸ばすけど、届くはずもない。

「たっくん、なーにやってんの」

不意に話しかけられて、思わず手を引っ込める。

「なにかっこつけてんのよ」

そう、笑いながら歩いてくる彼女は、光という名を持つ。その名の通り、眩しすぎるほどの存在だ。ちなみに、たっくんと呼ばれた僕は拓史という名前。

僕と光は小学校から同じで、中学・高校も同じ。常にクラスのマドンナ的存在の彼女。

そんな彼女と、僕はまさかの結婚を果たせるのだ。

付き合い始めたのは高校のときだった。

彼女がいきなり告白してきたことがきっかけだった。

でも、僕はすぐには返事を返さなかった。

なぜなら　その時、僕には彼女がすでにいたから。

「たっくん。外を散歩しようよ」

昔の事を考えていたが、彼女の声で現実に戻った。

「おっ」

さっきまで横になっていた庭の芝生から立ち上がり、外に出る。

光は僕の腕に手を回す。

胸が当たりそうになってドキドキしながら、少し散歩する。

こういつのを、幸せって言うのかな。

散歩のコースはいつも通り。

道なりに沿っていくと、広い場所に出る。そこは、小さな丘である。

そして、丘の上には、またまた小さな鐘。

ここに来る度に思い出す。2つの思い出を。

1つは、光との思い出だ。

告白されたときもこの丘の上だった。

僕がプロポーズしたときもこの丘の上だった。

2人で小さな小さな鐘を鳴らした。

そして、もう1つの思い出は……。

「……くん！ たっくんてばっ！」

「あ、うん。ゴメン。ぼーっとしてた」

どうやらずっと呼ばれていたらしい。どうも考え事をする则自分の世界に入ってしまう。

それでもすぐに許してくれる光は、この世で最高の女性に違いない。いや、少なくとも僕はそう思っている。

「まあいいや。それより、丘の上に登ろうっ！」

光に手を引つ張られて丘を登る。

風が強いな……。鐘が勝手に鳴っている。

この丘に登ると、いつも風が強い。

コーン……コーン……

鐘の音は弱々しく、だが心に響く音色だ。

それはまるで僕と光を祝福しているかのように……。

プルル……プルル……

ふと電話が鳴って、携帯の画面を見る。

『理奈』と表示された画面に、一瞬焦るが、すぐに電話を取る。

「……もしもし？ 理奈？」

「……うん」

小さく答えた理奈は、少し間を開けて言った。

「今日……会えない？」

「えっ」

その問いに戸惑ったが、すぐに答えた。

「いいよ」

初めて光にウソをついた。

理奈に呼び出されたのに、光には『仕事』と言って出てきた。

暗い空は僕をどう思ってるのかな？　なんて、意味のない質問を試みるが、答えは返ってくるはずもない。

トボトボと歩いていると、ある店で立ち止まる。

『居酒屋　理史』

理奈と拓史の名前が入ったこの店に、2人は好感を抱いていた。

「いらっしやい」

そう言われて入ると、店はほとんど変わっていない。

見ると、既に理奈は席に座っている。

「……理奈」

声がかすれる。なんで緊張なんてしてるんだろ。

「拓史。座りなよ」

促されてやっと席に着く。だが、何を話していいのかがわからない。

沈黙を破ったのは理奈だった。しかも、思いがけない話で。

「私……やっぱりまだ拓史のこと好き」

僕は聞き間違えたのかと思ったほど訳がわからなかった。

実は、理奈と僕は高校のとき付き合っていたのだ。

だが、光と付き合つときに別れた。

しかも、僕が『フット』ではなく、僕は『フラれた』のだ。

それなのに、今更こんな事を言われたのだ。理解しがたい。

「何を……」

そう言おうとしたのだが、その言葉は理奈によってかき消された。

重なった唇。

居酒屋の大将も度肝を抜かれている。

理奈は唇を離した。理奈はいつもこうだった。デートも理奈が計画して、コースも理奈が考えていた。かなり積極的だった。僕から提案したことなんてほとんどなかった。

「……………光に怒られちゃうね」

そう言った笑顔に、僕の心は揺らいだ。

僕は最低な男だ。

結婚を間近に控えているのに、他の女性に、しかも昔の恋人に心を動かされるなんて。

その後は他愛もない話をして、居酒屋を出た。

顔が赤らむ理奈はまた可愛い。

「……………バイバイ」

名残惜しそうに言ったその言葉は、これから一生理奈と会えないような気がしてならなかった。

結婚式当日。

あの日からどうにも理奈の事が頭から離れない。今日は結婚式だといつのに。ちゃっかり真っ白な服に身を包んでいるのに。

だが、僕の思いは一瞬にして消された。

「光……」

ウェディングドレスを身に纏った光は、この世のものとは思えない美しさを放っていた。

「綺麗だ……」

お世辞でもなんでもなかった。心から出た言葉だった。

「それでは、準備がありますので……花嫁はこちらに」

軽く手を振って別れる。

光の姿が見えなくなった瞬間だった。タイミングを見計らったかのように電話が鳴った。

「もしもし」

「……拓史くん？」

この声は

「理奈が大変なの！」

「……え？」

確かに、この声は理奈の母親の声だ。

そして、母親が大変だというような事態？

「とにかく、病院に来て」

もう最後の方は聞いていなかった。体が勝手に走り出していた。

教会を出る。空は雲がかかっている。雨が降りそうだ。

そんな事、考えている場合じゃない。

僕は走り出した。

道行く人がみな僕を見て振り返る。真っ白な服を着た男が走っているのだ。気にならないはずがない。

病院はまだ距離がある。もっと早く　もっと早く！

焦る気持ちは次第に大きくなっていくが、足が速くなるはずもない。

教会を出て30分ほど経ったであろうか。

病院が見えた。

雨も降ってきて、服はグシャグシャになっている。

そんな事は気にも留めない。早く行かないと　。

病院に入っても、足は止めない。部屋の番号は聞いてある。

受付の女性が妙な目で僕を見ているが、今はそんな事どうでもいい

！

エレベーターを待つのも煩わしく、階段を走る。

医者にぶつかりそうになりながら、やっとの思いで部屋の前に立った……。

ノブに手を回す。

ガチャ……

「拓史くん……？」

そこにいたのは、理奈の母親だった。

「理奈は……？」

質問を質問で返すのは無礼だが、今はそんな事を言っている状況じゃない。

「もう……目を覚まさないかも……」

唐突過ぎた。

理奈はいつも……自分勝手に……

涙が頬を伝う。

理奈の顔を見るが、どう見てもどうもなっていない。

「理奈は……どうしたんです？」

恐る恐る聞いてみる。声は震えていたに違いない。

理奈の母親は、辛そうに口を開いた。

「車に……ひかれたの」

その言葉を聞いた途端、理奈をひいたヤツが憎くて憎くて仕方なかった。

それと同時に、理奈の側にいてやりたかった。

「理奈」

手を取ると、まだ温かい。目を覚まさないかもしれないなんて、信じられなかった。

理奈

「拓史」

かすれた声が聞こえて、目が覚めた。眠っていたらしい。

声の方を見てみると、確かに理奈が起きていた。

「り……理奈！」

「拓史のバカ」

小さく言った言葉は、僕の心の奥深くを刺激し、傷つけた。

弱々しく振り上げた手で、僕の頬をはたく。

全く痛くない。なのに、ズキズキと刺激される……。

「なんで……いるのよ。結婚式……でしょ」

「結婚式なんてどうでもいいよ！俺は理奈と……」

「……バカ。早く行ってよ。拓史は……光を……幸せにして。それが私にも幸せなの」

僕は、理奈と知り合えたこと、そして、理奈と付き合えたこと
全てに、感謝した。

いつもならするはずもないキス。

最後のキスは僕からだった。

僕は、最低な男だ。

今日は結婚式だというのに。

他の女性とキスなんて。

最低だ……。

でも、この罪を償うために、僕はまた走る。

街は大雨で、人もなく閑散としている。

もう服は泥だらけだ。

みすばらしい姿をした僕を、光は迎えてくれるかな？

きつと彼女なら。

期待と不安が入り混じった感情の中、教会のドアを開ける。

そこには誰もいなく、ただ雨の音だけがこだましていた。

期待外れじゃない。

当たり前だろう。

新郎がいない結婚式なんてあるはずもない。

結局僕はどちらの女性も幸せにできなかつたんだ。

雨の中を歩く。

頬を雨が伝う。涙と、雨が混ざった液体状の物質は、口に入ると、少ししょっぱくて、悲しい味がした。

自分がどこへ向かっているのかさえわからず、ただ歩いている。

いつも通りの散歩コースを歩いている。

いつも通りに前が広がった場所に出る。

でも、いつもと違う所がある。

丘の上には、綺麗なドレスに身を包み、鐘を鳴らす女性がいて、僕の側に女性がいない。

その鐘はいつまでも鳴り響くだろう。

いつまでも　いつまでも。

「鐘はいつまでも鳴り響き」by豆腐

まだ鳴りやまない。

あの日の、あの音。

「ねえ、どうしてこっちななの？ さっきの交差点、右折の方が近道だよ」

そんなことは知っていた。

おれはハンドルを握ったままで、ちらりと左に目をやる。ロングヘアの毛先をいつものように弄びながら、ただ不思議そうに、佳奈がこちらを見ている。

おれは視線を戻した。わざと大げさに、ため息をつく。

「おまえ、それはあれか、おれの運転テクニクを試そうってか。保険料が値上がりの一途をたどる、このおれの」

「あはは、そっか、難しいか」

けらけらと声をあげ、佳奈は笑った。思いがけず彼女の笑顔が見られたことに、おれはこっそりと幸せを感じる。

木下佳奈。つきあって丸一年になる。好奇心に満ちた大きな目も、トラブルを気にするわりには綺麗な肌も、少し低い背丈も、無意識に毛先をいじる癖も、すべてが気に入っている。

もちろんそんなこと、口に出していつてやるほど、おれは恥ずかしい人間ではない。

くるくると指に髪を巻きつけながら、彼女は思い出したように続けた。

「それに、あつちは近いけど、開かずの踏切があるもんね。もしハマっちゃったら、逆に遅くなっちゃうかも」

「……よく知ってんなー。ガキのころちょっと住んでただけなんだから」

おれは素直に感心した。佳奈のいうとおり、彼女の示した道は近道ではあるが、一度閉まるとなかなか開かない踏切を通過しなくてはならない。地元では有名な、開かずの踏切だ。付け加えるなら、そこに至る路地は幅が狭く、車一台通るのがやっとだ。近道と知っていても、おれのようにわざわざ避けるやつは多い。

「ちよつとじゃないよ、何年かいたよ。よく行った駄菓子屋とかも、全部覚えてる」

「相変わらず食い意地がはってますなー」

「あ、またそういうこという」

子供みたいに頬をふくらませる。狙っているんだか狙っていないんだか、ともかくおれは佳奈のこの顔がお気に入りなので、ときどきわざと怒らせてみたりする。

おれたちの始まりは、笑ってしまっただけありきたりなものだ。大卒で同じサークルに所属、話していくうちに、お互いの地元が同じだと判明。そこから意気投合。そこら中にごまんと溢れている出会のドラマ。……まあそれでも、おれはそのチープなドラマに感謝しているわけだが。

そうこうしているうちに、最寄り駅に到着した。スロープに入り、ゆっくりと停車。

「ありがと。また明日、学校でね」

「おう」

白いスカートをふわりを揺らし、佳奈は小走りに去っていった。少し名残惜しい気持ちで見送りながら、俺はハンドルを握る。運転は得意ではないのだ。ライトをつけなくてはならなくなる前に、帰ってしまいたい。

ウィンカーを出し、ハンドルを切って、アクセルを踏もうとする。

不意に、踏切の鐘の音が、聞こえてきた。

おれは、どきりとした。

駅のすぐ西側にある踏切だ。ここにいれば、聞こえてくるのはあたりまえのことなのに。

脳裏にずっと響いている、鐘の音と重なる。

そのまま、おれの中のすべてが、止まってしまったような錯覚に陥った。

やめてくれ。

その音をとめてくれ。

どうか、どうか……もし、できるのなら、おれは

クラクシオンを鳴らされ、我に返った。おれは慌てて、右足に力を込めた。

そもそも、佳奈があんなことをいいたのが悪い。

しかし、そんなことを悔やんでも、しょうがなかった。

おれは夢の中で、ひどく無邪気な少年になっていた。

なにもかもに守られ、なにもかもを得られると信じ、怖いものなどなにひとつなかったあのころ。

どこまでも自由だった、愚かなあのころ。

カンカンカンカン

踏切が鳴っている。

開かずの踏切。

幼いおれは舌打ちした。踏切を越えた公園で、クラスの友人と野球をする約束だった。

こんなところで、足止めを食っている場合ではない。

おれは、右と左とに、ずっと延びる線路を、せわしなく交互に見た。

これだけ見通しが良いのに、電車が来る気配などない。ちょっと遮断機をくぐって、一気に走り抜ければ、向こう側に行ける。たったそれだけの話だ。

おれは意を決した。

ひよいとしゃがんで、線路の中に入った。

「ダメよ！ 危ないわ！」

女の人の声が出た。誰もいないと思ったのに、いつの間に来たのだろう。おれは心臓を捕まれたような気になって、身を縮こまらせた。

しかし、まさにその一瞬のためらいが、余計だった。

「走って！」

怒鳴るような声。右側から、想像もつかないぐらいの勢いで、でもなぜか、妙にゆっくりと 電車が迫ってくるのが見えた。

走れ、走れ 脳が命令を送る。動かない。動けない。なぜ？

どん、と背中を押された。

おれは突き飛ばされ、全身をしたたかに打ち付けた。足先のすぐ向こうを、恐ろしい速さで、白い箱が通っていく。

どこからか悲鳴が聞こえた。それが誰の悲鳴なのかはわからない。もしかしたら、おれのものだったのかもしれない。

おれはほとんど無意識に立ち上がった。

そのまま振り返らずに走った。

後ろで何が起こったのかなど、考えたくもなかった。

何もかもを、事実さえも置き去りにしたくて、とにかく走った。

それから、あの鐘の音は、止んだことがない。

「ねえ、聞いてるの？」

大きな瞳がおれを見上げていた。

おれははっとした。

あれから毎晩見る夢が、とうとう白昼夢となって現れたのかと思っただ。

「えと……ああ、うん」

自分でもバカみたいだと思いつながら、適当に相づちを打つ。机の

上の資料を見て、ゆっくりと状況を思い出した。ゼミのレポートを、佳奈と二人、仕上げているところだったのだ。

「もう、私、帰る」

頬をふくらませ、立ち上がる佳奈の姿に、おれは完全に寝起きのテンションで、駆け引きも忘れて焦ってしまった。

「え、や、悪い！ 違うんだ、ちよつと調子悪くて……」

「ほら、聞いてなかった。だから、そろそろ帰んなくちゃいけないから、駅まで送ってってば」

やられた おれは頭を抱えた。このままでは、主導権を持って行かれてしまう。

断る理由もなく家を出ると、ガレージに車の姿がなかった。滅多に乗らない親が乗っていつてしまったらしい。

「あー、しまった。自分の車欲しいなあ、やっぱ」

「いいじゃん、近いんだし。歩こうよ」

佳奈が嬉しそうに右手を差し出す。どこで知り合いが見ているかわからないのに、つなげって？

おれはむっつりとしながらも、その手を握った。

抱き合うより、キスをするより、こういう方が恥ずかしい。

「近いっつっても、歩くと二十分はかかるぞ」

自分でも照れ隠しだということがバレバレな悪態が口をつく。佳奈はくすくすと笑った。

「いいよ、懐かしいし、お散歩がてら。私の好きな道、通っていい？」

佳奈は本当に記憶力が良いようだった。

今も尚営業中の、おれも昔は世話になった昭和感溢れる駄菓子屋の横を通り、いまではスーパーになってしまった過去の空き地の前を通り、ぎりぎりで学区が違うので、幼いころはお互いの存在など知らなかったが、それでも記憶を共有しているというのは、妙な気分だった。

おれは恐らく、舞い上がっていたのだろう。

嬉しそつに思い出を語る佳奈と手をつないだまま、いつもよりもゆつくり歩く。いま自分がどこを歩いているのかなど、意識していなかった。

「ここ、よくお母さんで行ったんだ。あ、このパン屋も。懐かしいなあ」

大きな瞳をくるくると動かして、佳奈が思い出を語る。

幼い佳奈と、若くして亡くなったのだという、見たこともない母親の姿が、目の前にあるような気になった。

こつやって、何十年先も、思い出を　そのときは、正真正銘共有している思い出を　語り合えるといいと、ふと思つ。

おれは幸せだった。

だから、たぶん　ばちがあたったのだ。

カンカンカンカン

踏切の鐘の音。

いつの間にか、開かずの踏切の前にいた。

遮断機が、ゆつくりと降りていく。

「あーあ、引つかかっちゃった。長いのにね」

佳奈が頬をふくらませる。つないでいた右手を離し、毛先をいじり始める。

急に寡黙になったおれには気づかず、佳奈は一步前へ出ると、左右を注意深く見た。

「ね、通っちゃおうよ。まだ来ないみたいだし」

無邪気な光をその瞳に宿して、にんまりと笑う。

「お、おい　それは」

声がつわずつた。

かまわずに、佳奈は遮断機をくぐる。

記憶と、今とが、頭の中で入り交じる。

右の方から、電車がやってくる。
よせばいいのに、おれは叫んでいた。

「危ない、走れ　！」

佳奈はひどくゆっくりと振り返り、微笑んだ。

まるであたりまえのように、ふわりと両手を広げる。

おいで、と。

おれは走った。力任せに佳奈を突き飛ばした。

すぐ近くに、白い箱が迫っている。

ああ、どうか、彼女だけでも無事に

遠いあの日の悲鳴が、聞こえた気がした。

幼いおれが、今度こそ振り返り、背後で起こった事実をしっかりと見ていた。

人形のように跳ぶ身体。

走り抜ける白い箱。

その向こうで、悲鳴を上げる、おれと同じぐらいの幼い少女

「母さん　！」

少女の目は大きく、好奇心に満ちていて、背は決して高くはなく

そう、それはまるで

真っ暗になった。

それでもまだ、鐘は鳴りやまない。

暗闇の中で、なぜか、佳奈の満面の笑みが見えた気がした。

ああ、良かった　君が幸せに笑うのなら、それで。

「白時雨」by へボ

十一月下旬。早朝の住宅街に今期初めての霜が降りました。点在する裸の街路樹にも、立ち並ぶブロック壁にも、眠ったままの車の上にも、真っ白の霜が降りています。光が射し込めば、その輝きはさらに純度を増すのですが、あいにく空には暗雲がひしめき合っていました。

重い空の下。広がる氷の世界の一角に、なぜかこの時期に咲いてしまったたんぽぽがひっそりと花を咲かせていました。小さなたてがみを精一杯広げるたんぽぽ。しかし今は身体中に張り付いた結晶に、身も心までも凍らされてしまいそうです。がちがち震える声で周りの霜に尋ねました。

「どうしてこんなに凍てつく氷で世界を覆ってしまうのですか？」
霜はしばらく考えて答えました。

「そんなこと、あたしたちに聞いてもしょうがないわ。だってそういうものなんだもの。冬が近づけば霜が降りる。そういう風になっているのよ。まああなたのは気の毒だと思うけど、仕方ないんじゃないかしら」

それっきり霜は何も答えることはありませんでした。寒さに震えるたんぽぽは、次第に呼吸も辛くなってきていました。

そこへ、ひゆるりと、枯葉を巻き上げながら北風が吹いてきました。北風はひゆるりひゆるりと気ままに街を駆けていきます。たださえ凍え死んでしまふんじゃないかと思うほどに寒かったたんぽぽは、北風の登場によってさらに寒くなってしまいました。身体が動かなくなるほどの寒さを、たんぽぽは初めて経験したのです。素直な驚きと濃くなる死の色にたんぽぽは感動しました。こんな世界があるんだ。たんぽぽはうまく回らない口をどうにか動かして、北風に尋ねました。

「どうしてすごく寒かったのに、もっと寒くなるようなことをする

のですか？」

北風は少し考えて答えました。

「そんなこと、俺たちに言ったってしょうがないぜ。だってそういうもんなんだからな。冬が近づけば北風が吹く。そういう風になってんだよ。まああんたのことは気の毒だとは思うが、仕方ないんじゃないの」

それっきり北風が答えることはもうありませんでした。たんぼぼは運ばれてきた枯葉を眺めました。茶色く色あせた表面にはうっすらと霜が降りていました。

雲が早く流れていきます。空はどんどん黒く、暗くなっていきます。そのうちに、たんぼぼはぼつぼつと身体を濡らす雨に気が付きました。北風も強さを増しています。寒さで意識が遠のいていくのを感じながら、たんぼぼは降り始めた雨に尋ねました。

「どうしてこんなに冷たい雨を降らすのですか？」

雨は考えることなく答えました。

「そんなこと、おいらたちに聞いてもしょうがないさ。だってそういうもんなんだからね。冬が近づけば雨はやがて雪に変わる。そんなの道理なんだ。自然の摂理なんだよ。ほら、例えばこんな風にね」
そう雨がいうと、雨は次第に透明な粒から、白くどこか重みを感じさせるものになってきました。雨と雪が混じった白い雨。たんぼぼは霞む瞳でその雨を眺めました。

「時雨はみぞれに変わり、大地を冷やして、やがて雪を積もらせる。雪は世界を覆い、春が目覚めるその時まで静かに時間を止めるんだ。君にとってはこれ以上ない災難だろうけど、そういう風になっているんだよ。まあ君のことは気の毒だと思うけど、仕方ないよね」
それっきり雨は何を言うわけでもなく、しとしとと白い雨を降らしていきました。そうしてついに、たんぼぼの瞳は光を見ることを止めてしまいました。

白い雨がたんぼぼの身体に当たります。少しずつ少しずつ積もっていきます。北風が吹いて、いつの間にかいなくなってしまうていた

霜に変わって、みぞれがたんぽぽの体温を奪っていきます。

いつしかたんぽぽは、冷たさや寒さを感じる事が出来なくなってしまう。感覚がどこにもないのです。目も見えない。何も感じない。そういえば音も聴くこともなくなっていきます。たんぽぽは静かに、自分の死を感じていました。一方で何だか吹っ切れた気分でした。

だって、全ては仕方のないことだから。

たんぽぽが十一月に咲いてしまったことも、霜が降り、北風が吹き、みぞれが降って、たんぽぽが死んでしまうことも、全部全部当然であるからこそ仕方のないことだからです。

たんぽぽは、穏やかな暗闇の中を漂いながら、奥へ、底へ、ゆっくりと落ちていきます。そこにあるのは巨大な一本の流れ。海から出でて、海へと帰る河。とどまることを知らないその流れを前にして、たんぽぽはこっそりあの枯葉に尋ねました。

「どうして僕はここにいるの？」

けれど、ここにはもういない枯葉から聞こえる言葉なんてあるはずもなく。

答えのない問いかけを秘めたまま、たんぽぽは河へと沈んでいきました。

「怪盗『イルミネーション』」by豆腐

何か黒い影が、動いた気がした。

トイレから戻ってきた祐樹は、寝ぼけながら、窓に近づいた。カーテンを閉めるのを忘れていたらしい。またママに怒られる。そんなことを思いながら、手を伸ばす。

やはり、何かが動いた。

時刻は深夜二時。窓の外に、何かがいていい時刻ではない。

「……だれですかー？」

半分寝たままで、窓を開ける。寒い。まさかサントさん？ いやでもまだ十二月になったばかりだし……祐樹はちよつと首をかしげて、大きくあくびをした。

「ばれてしまつては、しかたがない」

不意に、いやにダンディーな重低音が響いた。

さすがに祐樹の目も覚めた。信じられない思いで、目の前に仁王立ちする、大きな男を見上げる。

「我が名は、怪人イルミネーション！」
ちよつと困った。

どうしよう。

ママかパパを呼んできた方がいいだろうか。しかし、この大きく愉快なおじさんが、何か悪さをするとも思えなかった。

全身に豆電球がくつつついている。帽子にサングラス、マスクまでしているが、サングラスの中央にも豆電球がついており、時折ぴかぴか光るので、怪しいというよりはおかしい。

「あの、うちになにかご用ですか」

聞いてみた。礼儀作法ばつちりな植田祐樹、六歳。来年は小学生だ、恐れおののいているわけにはいかない。

「はっはっは、ご用といわれればご用だとも！ 夜が闇である限り、人々の心と家の庭先とテーマパークに光を灯すのが、私の仕事だ！」

怪人イルミネーションは、人差し指を祐樹の胸に突きつけた。
ピカーッとサングラスの豆電球が赤く光る。

「君の心に……ライト、オン！」
ずきゅーん、と銃を撃つような仕草をすると、片方の電球だけが瞬いた。ウインク仕様。

そのまま、とう！ とかいいながら、姿を消した。

消したというより、全身の豆電球を消して闇に紛れたので、見えなくなった。

「……………」

祐樹は、ぼんやりと、暗闇を眺めた。

「……………寝よう」

数秒後、現実的な結論を導き出し、ベッドに潜り込んだ。

翌朝。

母親 喜美恵の悲鳴で、祐樹は目覚めた。

「大変！ パパ、祐樹、ちょっと来て！」

どちらかという嬉しそうな悲鳴だ。なんだか眠いなと思いつつ、寝間着のままでもたもた歩く。喜美恵の元へたどり着くと、玄関の外にまで連れ出された。

「なにー？」

「大変なの！ 出たんだわ！ 怪人イルミネーションよ！」

「…………？」

なんか聞いたことがあるぞ、と祐樹は記憶をさぐる。

新聞を持ったまま出て来た父親が、感嘆の息を漏らした。

「こりゃあ、見事なもんだなあ」

その言葉に、初めて、祐樹も見た。

玄関戸の前に、電飾で作り上げられたクリスマスツリーとサンタクロース。塀にも花壇にも、これでもかと電球がちりばめられている。
「素敵！」

喜美恵は身をくねらせ、そう感想を述べた。

怪人イルミネーション、各地に現る！

四十代後半と思われる中肉中背の中年男性が、夜中、民家やテーマパークに侵入し、無断でクリスマスイルミネーションの飾り付けをするという事件が相次いでいる。

「とても綺麗で喜んでいます」という感謝の声から、「やるなら電気代も払ってくれ」という家計を憂える声まで、被害者の声は様々あるが、不法侵入であることは疑いようのない事実であり、どうにか怪人を捕獲しようという動きが高まっている

祐樹は、子ども新聞を厳かに置いた。

なんか世の中大変だな、ということは何となくわかった。

事件のあったあの日以来、祐樹は新聞やテレビに気をつけるようになった。気にして見ていると、世の中は怪人イルミネーションの話題で溢れていた。

どうやら、怪人イルミネーションを捕まえるために、どこかの企業が宣伝も兼ね、「省エネ戦隊 シゲンジャー」結成したらしい。シゲンレッドの必殺技は、自家発電だそうだ。

「ねー、ママ」

祐樹は台所で忙しく動く喜美恵に声をかける。喜美恵はいつものように動きは止めず、声だけ返してきた。

「なあに？」

「クリスマスが終わったら、イルミネーションってどうなるの？」

喜美恵は、台ふきでテーブルを拭き始める。こともなげに、

「そりゃ、かたづけなくちゃ」

さらりといった。

「じゃあ、怪人さんのやったこと、ぜんぶ無駄だったの？」

「世の中、無駄なこと必要なのよ」

祐樹は、なんだかやりきれない気持ちになった。これだけ世の中を綺麗に飾ってくれているのに。

それとも、あのおじちゃんは、全部わかっててやっているのだろうか

「怪人イルミネーションは、犯罪者なの？」

「まあ、自分で怪人っていうぐらいなものねえ」

祐樹は、あることを思いついた。

すぐに部屋にもどり、机に向かった。

落書き帳を引っ張り出し、鉛筆を持つ。

かいじんイルミネーションさんへ

ぼくのおうちをぴかぴかにしてくれてありがとうございます。

とてもきれいだってママもおよろこびです。

パパもすごいなっています。

ぼくも、とても、かんしゃしています。

だから、ぼくは、しょうらいかいじんさんみたいに、いろんなひとのこころとにわとテーマパークにひかりをともしひとになります。でしにしてください。

ゆうきより

会心のできだった。

丁寧に折りたたんで、封筒に入れた。雨に濡れてもいいようにビニール袋に入れ、庭先にそっと置いた。

よくわからないけれど、あの日確かに、祐樹の心には、光が灯ったのだ。

「四年後の僕ら」 by へボ

光が殺意を持つことがあるなんてこと、君は想像したこともなかった。

ずっと閉じ込められていた施設の蛍光灯は、無機質で冷たく、四方を全て白に覆われていた君たちの“世界”をただ照らしてただけだったから。だから、こんな風に深く暗い夜の森の中で舐めるようにして走る光の姿はとても奇妙で怖かった。意思を持って君たちを追う光の存在は、まるで底なしの沼のように、じわりじわりと君たちの余裕を削いでいた。

君たち五人はただただ走っている。施設にいた時と同じ、味気のない水色の布のような服を身に付けて、目印もない、出口も分からない森の中を走っている。緑の濃い、力強い森だ。

足元には日中の少ない木漏れ日を浴びようと、貪欲に草が生い茂っている森。走ってきた道筋など、とうに呑み込まれ分からなくなってしまうているだろう。彼らは生きているのだ。

そんな草を見下ろす木々が君たちを見つめている。その太い幹をどつしりと大地に据えて君たちを見つめている。動けない彼らは、しかし明確な意思を持って君たちを迷わせようとしている。命の力を獲ようとしている。彼らは生きているのだ。この森の闇夜に動物の声は響かない。

走る君たちを幾筋もの光が追う。君たちの頭上を、左右を通り抜けて、森を照らし出す。君たちを探している。その光が森を明るくする度に、君たちの筋肉は一瞬縮こまって、息が詰まる。歩幅が乱れてしまう。捕まって施設に送り返されてしまうかもしれない。そんな絶望的な未来が脳裏をよぎる。表情に暗い影が差し込む。

けれど、それでも君たちは走ることをやめない。そうだからこそ走ることをやめない。逃げ出すために、自由を手に入れるために、何より君たちの家族を奪い去った奴らにいつの日か復讐するために、

君たちは走っている。先の見えない森の中を、闇雲に走り抜けていく。

「あつ」

そんなか細い声を発して、君たちの中の一人が盛大に転倒した。張り出していた木の根につまづいてしまったのだ。君たちは数歩走った後で一斉に立ち止まる。転んだ仲間の下へと集まる。

すぐさま少年がしゃがみこんで状態を確かめる。転んだその子は、君たちの中では一番幼い女の子だ。彼女は右足首に両手を添えて苦痛に表情を歪めている。額に浮かんだ大粒の汗が、次第に数を増していっている。目尻に涙が浮かんでいた。

少年が彼女に手を解くよう指示する。彼女はゆっくりとその掌を解いた。そこには赤く腫れ上がった細い足首があった。

「挫いてしまっているようだ」

しばらく足首の状態を確認していた少年がそう呟いた。

「もう走ることには出来ないと思う」

その瞬間、君たちに降り注ぐ森の闇は、一段とその濃度を増したようだった。

「……わたしはここまで。みんなは逃げて。すぐにあいつらがやって来る」

彼女はそう言って、痛みに耐えながら残酷な運命に耐えながら微笑んだ。逃げられないと、足手まといになってしまうと悟り、諦め、未来を受け入れてしまったのだ。仲間を想うが故の自己犠牲。君たちの、とりわけ君の心はそんな彼女の表情に強く反応した。

みんなで逃げるんだ。絶対に。

そう君が仲間たちに約束したんだっただよね。

「俺が負っていく。相対的に速度が落ちるから、人数が多いと見付かりやすくなるだろう。ここでお別れだな」

君は力強くそう言った。

「あたしたちはいいけど、あんたは大丈夫？」

「心配ない」

仲間の心配も吹き飛ばす、はつきりとした声だ。それに仲間たちも力強く頷き返す。彼女だけが状況を理解できず、口を開け呆けた顔をしていた。

「そう言う訳だ。まだ終りじゃない」

君は彼女に笑いかける。あの時の約束は今の君たちを繋ぐ一番暖かな温もりになっていた。

「ごめんね」

しゃがみこんだ君の背後、背中にしがみついた彼女はぼつりとそうこぼした。

「気にするな。これは俺たちのエゴなんだ。仲間を残したまま逃げたくないという、お前の想いを踏みにじるエゴなんだ。お前が気を病むようなことじゃない」 光が殺意を持つことがあるなんてこと、君は想像したこともなかった。

ずっと閉じ込められていた施設の蛍光灯は、無機質で冷たく、四方を全て白に覆われていた君たちの“世界”をただ照らしていただけだったから。だから、こんな風に深く暗い夜の森の中で舐めるようにして走る光の姿はとても奇妙で怖かった。意思を持って君たちを追う光の存在は、まるで底なしの沼のように、じわりじわりと君たちの余裕を削いでいた。

君たち五人はただただ走っている。施設にいた時と同じ、味気のない水色の布のような服を身に付けて、目印もない、出口も分からない森の中を走っている。緑の濃い、力強い森だ。

足元には日中の少ない木漏れ日を浴びようと、食欲に草が生い茂っている森。走ってきた道筋など、とうに呑み込まれ分からなくなってしまうっているだろう。彼らは生きているのだ。

そんな草を見下ろす木々が君たちを見つめている。その太い幹をどつしりと大地に据えて君たちを見つめている。動けない彼らは、しかし明確な意思を持って君たちを迷わせようとしている。命の力を獲ようとしている。彼らは生きている。この森の闇夜に動物の声は響かない。

走る君たちを幾筋もの光が追う。君たちの頭上を、左右を通り抜けて、森を照らし出す。君たちを探している。その光が森を明るくする度に、君たちの筋肉は一瞬縮こまって、息が詰まる。歩幅が乱れてしまう。捕まって施設に送り返されてしまうかもしれない。そんな絶望的な未来が脳裏をよぎる。表情に暗い影が差し込む。

けれど、それでも君たちは走ることをやめない。そうだからこそ走ることをやめない。逃げ出すために、自由を手に入れるために、何より君たちの家族を奪い去った奴らにいつの日か復讐するために君たちは走っている。先の見えない森の中を、闇雲に走り抜けていく。

「あつ」

そんなか細い声を発して、君たちの中の一人が盛大に転倒した。張り出していた木の根につまづいてしまったのだ。君たちは数歩走った後で一斉に立ち止まる。転んだ仲間の下へと集まる。

すぐさま少年がしゃがみこんで状態を確かめる。転んだその子は、君たちの中では一番幼い女の子だ。彼女は右足首に両手を添えて苦痛に表情を歪めている。額に浮かんだ大粒の汗が、次第に数を増していっている。目尻に涙が浮かんでいた。

少年が彼女に手を解くよう指示する。彼女はゆっくりとその掌を解いた。そこには赤く腫れ上がった細い足首があった。

「挫いてしまっているようだ」

しばらく足首の状態を確認していた少年がそう呟いた。

「もう走ることはいらないと思う」

その瞬間、君たちに降り注ぐ森の闇は、一段とその濃度を増したようだった。

「……わたしはここまで。みんなは逃げて。すぐにあいつらがやって来る」

彼女はそう言って、痛みを耐えながら残酷な運命に耐えながら微笑んだ。逃げられないと、足手まといになってしまうと悟り、諦め、未来を受け入れてしまったのだ。仲間を想うが故の自己犠牲。君た

ちの、とりわけ君の心はそんな彼女の表情に強く反応した。

みんなで逃げるんだ。絶対に。

そう君が仲間たちに約束したんだったよね。

「俺が負っていく。相対的に速度が落ちるから、人数が多いと見付かりやすくなるだろう。ここでお別れだな」

君は力強くそう言った。

「あたしたちはいいけど、あんたは大丈夫？」

「心配ない」

仲間の心配も吹き飛ばす、はつきりとした声だ。それに仲間たちも力強く頷き返す。彼女だけが状況を理解できず、口を開け呆けた顔をしていた。

「そう言う訳だ。まだ終りじゃない」

君は彼女に笑いかける。あの時の約束は今の君たちを繋ぐ一番暖かな温もりになっていた。

「ごめんね」

しゃがみこんだ君の背後、背中にしがみついた彼女はぼつりとそうこぼした。

「気にするな。これは俺たちのエゴなんだ。仲間を残したまま逃げたくないという、お前の想いを踏みにじるエゴなんだ。お前が気を病むようなことじゃない」

君は立ち上がり、周りを見渡す。森の奥から奴らの足音と声が響いてくる。光は変わらず君たちを探している。もう時間はそんなに残っていない。

君は突然仲間たちの名前を呼んだ。君たち自身が自らつけた名前だ。自分を確立する、大切な宝物。君はそれらをひとつひとつしっかりと呼んでいく。

「またいつの日か、必ず、この仲間で」

君たちの瞳には希望が輝いている。閉じ込めておくことなんて出来やしない未来が輝いている。そんな眼たちが頷いた。またいつの日か。

そして君たちは別れ、走り出していく。君たちはそれぞれ違う道
を行く。君は三人が走り去って行くのを見届けると、別方向へと駆
け出した。

「……ありがとう」

背後で彼女が呟いた。君にしがみつくその腕は少し震えていたけ
れど、しっかりと君に抱きついていった。

君は何か答えることもなく走り続ける。言葉なんてなくても、伝
わる想いがあるのだと君は知っている。だから君は、返事をする代
わりに、強く強く、大地を蹴ったんだ。

「例えばたった一つの笑顔のために」by豆腐

「あたし、死ねる」

突然の由佳里の宣言に、達郎は茶を吹いた。

結婚して六年。三年前には愛娘である桃花も誕生し、家族三人、裕福ではないが幸せに暮らしている。

日曜の午後、昼寝する桃花を見て、ふと達郎がいったのだ。たとえば、桃花の笑顔のために何ができる、と。

「おまえ……どうしてそこで生死の問題になるんだ。おまえが死ぬと桃花が笑うのか」

由佳里は怒ったように達郎を睨みつけた。

「なによ、真剣に考えたのに。たとえば桃花がものすごい難病に冒されたとして、生きた心臓がないと治らないっていうなら、あたしは迷わず自分の心臓をあげられるってことよ」

なるほど、と達郎は一応納得してみせる。

しかし、すぐに首を振った。

「いやちよつと待て、そういうことなら俺も迷わず死ねる……いや、違う、やっぱりそういうことではなくてだな」

「じゃあなに」

いい歳なのに唇を尖らせて、詰め寄ってくる。こうなってしまうっては、どうやっても口では勝てないので、達郎は少し話題の方向を変えた。

「おまえな、そんなんだと、いまに桃花から『ママうざーい』とかいわれるぞ。プチ家出とかするようになるんだぞ。過保護はいかん、過保護は」

由佳里はさらに目を三角にした。

「じゃあ、心臓が必要な娘にそのまま死ねていえっていの」

「違うだろ、そうじゃない」

やはり勝てそうになかった。

達郎は咳払いをして、新聞を手を取った。自分でも不自然だとは思
いながらも、熱心に読み始めるふりをする。しかし、まだ妻からの
鋭い視線を感じる。どうしたものか。

意外なところから、助け船が出た。隣の和室から、桃花が起き出し
てきたのだ。

「ママ……」

目をこすりながら、なぜか毛布をひきずって、リビングにやってく
る。ママ、と呼んだのに、ソファに座る達郎の隣にちょこんと落ち
着いた。まだ少し眠たそうに、目をこすっている。

「あら、おはよう、桃花。今日はあんまり寝ないのね。いいの？」
由佳里がすぐに桃花の側へ行く。起き抜けの娘をあまり放っておく
と、すぐにぐずり始めるのだ。

桃花は、こくりとうなずいた。いいの、とかわいらしい声。

「そうだ、ねえ、桃花」

由佳里は目を輝かせ、桃花の隣に腰をおろした。ビッグサイズとは
いえ、二人がけのソファだ。達郎が追いやられるように、脇に寄る。
「桃花だったら、ママが笑顔になるために、なにをする？」

「ばかじゃないのか、と達郎は思った。三歳児に何を求めているのか。
桃花は、きょとんと由佳里の目を見つめ、ゆっくりと一回、瞬きを
した。

それから、ごくあたりまえのように、

「ちゅうする」

と、小悪魔の片鱗をかいま見せた。思わぬクリティカルヒットに、
由佳里は額を押さえて天井を仰ぐ。それは嬉しすぎる。

「じゃあ、もし、ちゅうでもだめだったら？」

どうにか復活して、そんな「もし」はあり得なかったが、もう一度
聞いた。由佳里とそっくりな仕草で唇を突き出し、桃花は真剣に考
え始める。

「……じゃあ、ママと結婚して、ママを守ってあげる」

「桃花！」

由佳里は感動のあまり娘を抱きしめ、力の限りほおずりをした。その隣で、達郎が、いかにも心外だといった様子で割り込もうとする。

「ま、待て桃花、結婚はパパとするっていったじゃないか」

「パパともするー」

「日本の法律ではな、一人としか結婚できないんだぞ」

他の法律はすつとばして、そこだけ強調する。桃花は「でもするの」といつて引かなかった。結局、達郎も桃花を抱きしめ、家族三人団子のようになった。

達郎にも、由佳里にも、わかっていた。

これは永遠ではない。

もちろん、結婚など、できるはずもない。

桃花だって、両親を疎ましく思うときが来るのだろう。

桃花だって、いつかは嫁に行くのだろう。

けれど、あともう少しだけ、どうかこのままです。

「モノトーンの歌にのせて」by ジル

あなたは覚えていますか？

あなたを優しく抱きながら、歌ってくれたあの歌を。

ICUの硬いベッドの上で、彼女は両手両足を縛り付けられ、元のマスクと、色が変わってしまった腕に刺された針で、命をつないでいた。

私はその横に座って、彼女の細い脛を、ずっとさすっていた。その足は骨そのもののようで、でもむくんだその肌は、死んだ鳥肉のように鈍くつやかだ。まるで人の肌とは思えないような熱さだけが、彼女が生きていることの証のようだ。

ぜいぜいというのどのなる声と、まるで全力疾走したあとのように膨らんでしぼむ胸。うっすらと開いた目。その奥の白い眼球。その目が私を映すことは、もうないのだろうか。マスクに覆われた口が、私の名を呼んでくれることは、もう、二度とないのだろうか。この数年は、まるで地獄のようだった。

アルツハイマーに犯された彼女は、記憶と引き換えにだんだんと幼さを取り戻していき、感情のままに振舞った。おなががすいたと泣き喚き、障子を破って嬉しげに笑い、表情を消した顔のまま、どこかを見つめた。昔の話を昨日のことのように何度も繰り返す、今話したことさえ忘れて、また何度も繰り返す。幾度目かの徘徊の後、散々探し回った拳句に保護された交番に引き取りに行った夜、私を

見て「誰？」ときいた彼女の顔を、忘れることができない。

私はあんたの娘だよ。

もう、何もかもやるせなく、そうわめいた私に彼女は言った。「私に子供はいないわ」そう言った口で、彼女は私に、小さな私のことを話して聞かせる。もう嫌。狭いコンクリートに囲まれた交番の中で反響した、私の手が彼女の頬をはたく音。あつけにとられ、今にも泣き出しそうに歪む顔。雨に濡れて額に張り付いた髪を伝って落ちる水滴。泣きたいのは私だ。あわてて間に入り、止めようとするおまわりさんを振り払おうともがく私を見る、恐怖に震える彼女の目。

どうしてそんな目で私を見るのよ。

親子の情愛などというものは、延々と続く介護の中で、とつくに磨り減ってなくなっていた。私が彼女の世話をしているのは、ただ、体裁と情性のためだけ。だから、秋の終わりの冷たい雨が降ったその日、私と彼女しかいないはずの家の玄関がからからと開いた音を聞いたとき、それが彼女の出て行った音だと分かっていながら放っていたのだ。夫と娘が帰ってきて、なぜ目を離したんだと私をなじつても、そのどこが悪いんだって思っていた。いつも彼女の世話をするわけでもなく、ただ厄介者扱いしているだけのあんたたちが何を言ってるんだ。

彼女は、あんたたちの母親じゃない。私の、母親だった人だ。あんなたちには関係ない。それなのに、体裁を気にして私を責めるのか。

結局彼女は、冷たい雨に打たれたせいで風邪をひき、肺炎を発症して病院に入った。病室でも、彼女はまるで子供のようで、点滴を嫌がって針を抜き、院内を徘徊するということを繰り返した。最初は、快方に向かうと見られていた病状も、そんな彼女の行動が招いたのだろっ、ついにはSARSも併発し、点滴を抜いたり出来ないように、手足をベッドにくくりつけられる羽目になった。

彼女は泣いた。手足の自由を取り戻そうともがいた。たとえ、紐

を解いたとしても、すでに自由に動くことのできる体力など残っていないにもかかわらず。

わたしは、できることなら病院になどきたくはなかった。縄を解いてと、ろれつの回らない言葉で訴える声と目から、逃れたかった。介護から自由になったのに、その光景が、私を縛った。

だけど、治療は順調に進まず、アルツハイマーの進行とあいまって、彼女はだんだんと動きをなくしていった。それにつれて、彼女は本当の子供のような、無邪気な表情を見せるようになった。そのころには、医師の言葉には諦めの響きが混じるようになっていた。手足を縛る紐は、とつくに解かれていた。もう、自分の意志で何かをすることは、ないということだろう。それでやっと、私は彼女の娘という役割を演じることが出来るようになった。毎日病室に訪れ、着替えさせ、身体を拭いてやり、髪に櫛を通し。まるで、親子が逆転したような、だけど、何か人形とままごとをしているかのような、嘘くさい毎日。

だけど、今夜になって容態の急変を知らされ、一度戻った家から駆けつけた私が見たのは、生きているのではない、ただ点滴と酸素吸入によって生かされているだけの、苦しげに顔をゆがめた彼女だった。

どんなに声をかけても、まるで聞こえていないようだ。ただ、荒い息と時折もれるうめき声、そして、再び縛り付けられた四肢が、紐を引く音。私は先生を見上げた。

もう十分です。楽にしてあげてください。

しかし彼は首を振り、病室から出て行った。どうして？ もう十分苦しんだじゃない。お願いだから、私を楽にしてよ。

私は、崩れるように、彼女の眠るベッドに突っ伏した。そして、泣いた。いつまで私は苦しんだらいい。でも大丈夫だ。もう少しだ。もうすぐなんだ。先生は、今夜か明日が山だと言った。それを超えてしまえば、私はもう一度彼女の娘を演じられる。楽になれる。私は彼女の死を願っている。それが情けなくて、涙が止まらなかった。

彼女がもがき、ベッドがきしむ音、喘鳴、そしてくぐもったうめき声
がきれぎれに聞こえる。

うめき声？

私は顔を上げた。吸入マスクをつけたままの顔を傾けて、彼女が私を見ていた。縛られた右腕が、私をなでようとするかのように伸ばされていた。くぐもった声は、聞き覚えのある音階をたどどしくなぞっていた。

ああ、それは。

私の視界に映る景色が、色を失っていく。まだ若い彼女が、歌っている。蚊取り線香の煙の中で、タオルケットを蹴散らす私にうちわで風を送りながら。私もそれを聞いている。風邪で咳き込みながら、額に乗る氷嚢の、氷の音をバツクにして。彼女は、何度も何度もその歌を歌い、私は何度も何度も、その歌を聞いた。

母さん！

私は、彼女の右手を縛る紐を解いて、胸に抱き、握り締めた。

ねえ、お願いだから死なないでよ。

私は、彼女の身体にしがみついた。

彼女の手が、私の背中をゆっくりとなでた。息が穏やかになり、そして、微笑んだ。

母さんが息を引き取ったとき、私は、涙でかれた声で、その歌をそつと歌っていた。母さんに教わり、そして自分も歌ってきたその歌は、きつと私の娘も歌ってくれる。親子の絆なんてものは、それで十分だ。

ねえ、母さん。

)
f
i
(n

「たったひとつの銃弾が世界を変える」byへボ

君と並んで歩く、ぽつりぽつりと街灯が灯り始めた分かれ道までの家路。左手に立ち並ぶ民家も、右手に広がる街並みも、暖かな光を宿しながら静かに佇んでいる。広がる静寂の中で繰り返す、私たちの短いおしゃべり。陽が沈んだ空に白い筋が昇っていく。そのまま溶けるようにして風の中に消えゆく言葉たち。空には、編みこまれた濃紺の暗闇と太陽の残光とが織りなすグラデーシヨンが広がっていた。

あともう少し時が経てば、この空は黒く深く塗り潰されて、山際に懸かるあの三日月はもつともつと綺麗に、淡く輝くのだろう。二つの足音が奏でる、このゆったりとしたリズムを奪い去って、神秘的な冬の夜は訪れるのだ。私たちの別れの時は、また今日も刻一刻と近づいていた。

見上げていた月を、君の声で視界の外に追い出した。そう言えばさ、今日、授業中に寝た奴がいてさ。飽きた表情と声とで、君は小さなエピソードを聞かせてくれる。

「それでさ、藤岡が真似て言うんだよ、『気を付ける。銃口はいつでもお前を狙っている』って。先生がチヨークを巧く投げた後だったからさ、もうみんな大爆笑だったんだよ」

出来るだけ伝わるように、出来るだけ楽しくなるようにして、いるかなんて私には分からないけれど、声のトーンを変えて、強弱をつけて、君は私には伝えてくれる。それがすごく面白くて、可笑しきで、私はついつい声を漏らして笑ってしまう。君の話は、凍える夜に小さなひまわりの花を咲かせるんだ。

例えば、私が事前にそのことを知っていたとしても、君が話すと楽しくて新鮮に感じる。もし、それが下らなくて心底詰まらないことだったとしても、君が話せば喜劇になる。この瞬間、君と二人一緒に居られるこの時ならば、どんなことだって不思議と楽しい物語

に変わってしまう。

君が言葉を紡ぐからかな。驚いてしまうくらいに君の言葉は色鮮やかで、どれもが明るくて、暖かい素敵なお色をしているんだ。君と私とを繋ぐ架け橋となってくれる。

ただ帰り道が同じだけだったのに。あの日、私が傘を家に忘れてしまったあの雨の日から、歯車は大きな音を立てて回り始めてしまった。きつと君の話には多少なりとも誇張や嘘が隠れていて全くの真実ではないのだろうけれど、そんなこと気にならない。君といられる。そのことが何より一番嬉しいことだから。

私はくつくつと笑いが止まらない。握った左手を、口の前に持ってきてしまう。笑う度に下がってくる髪の毛がちよつと鬱陶しい。強く瞑った瞼の端からは涙が溢れているような気がする。マフラーを巻いていてよかった。大きく広がった口角を君に見られるのは、少し恥ずかしいから。

こうやって君と過ごす時間がずっとずっと続けば良いんだけど。そんなこと、絶対に、起こりっこないから……。だからこの時、君と歩くこの時がとても大切に失いたくないものだから、こうやって一緒にいられることをとても幸せなことだと思っただ。

出来ることなら、君に伝えたい想いはあるのだけれど。

いつの間にか着いてしまうY字路。じゃあね。バイバイ。今日もまたそう言っつて、私は君に手を降るんだろつ。

「んじゃ」

君の手が私の肩に触れる。また明日。そう私は呟く。

きつと叶わぬ恋だから。出来るまで近づいたのなら、もう踏み出さない方がいいんだ。壊れてしまうことを、変わってしまうことを私はびくびく恐れていて、このままでこのままで、傷つかない傷つけない今のままでいることを望んでいる。臆病な意気地なしの恋。こんなこと、君に知られたら私は嫌われてしまつかもしれない。

離れるぬくもりは手を振って、違う道、私の知らないところへと帰ってしまう。

「バイバイ……」

本当は大好きなんだよ

そう胸の中で囁く。遠ざかる背中に今までのように。繰り返しては、そつと心の引き出しに仕舞い込むんだ。

私には怖くて伝えられないから。言葉の色が綺麗じゃないから。だから辛いけど、今日もこれでおしまい。何も伝えないまま、回れ右で家へと帰る。少し切ない穏やかな心を胸に、ひとり分の足音を夜空に刻んでいく。また明日。それまでの辛抱だから。

「りよこちゃん！」

突然背後からそう呼ばれた。君の声。凧いだ心に波が立つ。振り向くと、少し離れた街灯の下で君は私を見つめていた。その姿に、ついさつき君の口から放たれた言葉を不意に思い出す。気を付ける。銃口はいつでもお前を狙っている。

「俺さあ、やつぱり」

見つめる君の表情には、絡まり続けていた糸が綺麗に解けた時のような清々しさが浮かんでいて。君は言葉を紡ぎ出す。私まで届くように。しっかりと言葉が気持ちを運んでくれるように。君は叫ぶようにして、チューブから取り出したままの色の言葉に想いをのせて私に伝えてくれたんだ。

頬を赤らめはにかむ君は、素敵な笑顔をしていた。

じゃあ、また明日。その後君はそう言い残して、手を振り、暗闇の中へ駆け出していった。残された私。突然のことに立ち尽くし、しばらく何も考えられなかった私。こつこつ、こつこつ。今は家へと向かっている。

「やつぱり、りよこちゃんのこと好きかも……」

繰り返してみる君がくれたあの言葉。まっすぐ向き合ってみると、じんわり胸へと広がって、身体中の細胞が喜んでるように感じる。何だか熱くなってくる。歩調は大きく、足が飛び跳ねそうになる。

大切な人に好きと言われることど、こんなにも世界が変わるなんて。

自然と綻んでしまった口元に三日月だけが気づいていた。

「聖夜の影」 by へボ

ビルに挟まれた狭くて薄暗く汚い通路から、僕は通りを行き交う人々を眺めていた。彼らの足音は何重にも重なって響いている。その奥で、白い排気をもうもうと立ち昇らせて、何台も車が風を切っている。エンジンと走行するタイヤの音とが何度も何度も近づいては離れていく。通りに響くいくつもの音はいつもよりちょっとだけ浮き足立っているかのようだ。

そんな夜の空気には、小さく街中に溢れているのであろうクリスマスソングが溶け込んでいた。聖夜の賛歌。恋人たちのラブソング。人々の記念日に華やかな音を添えている。空から鈴の音が舞い降りてくるかのようだ。僕は狭い夜空を見上げる。お腹が小さく悲鳴を上げた。

鳴ったお腹を見る。萎みきったお腹を見る。丸三日間何も食べていない僕のお腹はあばら骨が浮き出し始めていた。水も満足に飲めなかったから、口の中はねばねばしている。ため息をつくことも忘れて、僕は小さく丸まった。とても疲れていた。

僕の冒険が始まってどれくらいの日日があったのだろう。ぴんと張っていたはずの自慢の髭は力なく萎れてしまったし、艶があって流れるように揃っていた毛並みは、薄汚れて固まってしまった。いつの間にか僕は野良猫のようになってしまった。首輪だけが僕を僕として認めていてくれた。

あの日、よく晴れた青空がたくさんの青をその中に内在させながら空一面を覆っていたあの日、僕の目の前に現れた小さな光を追って始まった初めての冒険は、いよいよ佳境を迎えようとしているみたいだった。

僕はできるだけ体力を使わないようにとじっと丸まっている。出来るなら高い場所にいたいだけけれど、あいにくここには何も無い。僕は冷たいコンクリートの上で丸まっている。この夜を耐えている。

けれども身体が求める食欲が精神を、凍えてしまうような冬の寒さが肉体を、徐々にそして確実に蝕んでいた。動かなければ寒さにやられてしまう。動いてしまえば少ない体力を消耗してしまう。そんな板ばさみに状態にあった僕は、最終的に小さく丸まりできるだけ体温を逃さないようにじつとすることにした。ゆつくりと破滅に向かうことを選んだのだ。

風が吹き荒ぶ。この狭い通路を吹き抜ける風は、狭いが故にその密度を、勢いを増して吹き抜けていく。僕の命を削っていく。僕に出来ることはただ目を閉じて風が止むのを待つことだけだ。暗い、夜よりも暗い闇の中でじつと耐え忍ぶことしか出来ない。僕はとても小さくて弱かったんだ。

耐え忍ぶ暗闇の中に、唐突に懐かしい人々の笑顔が浮かんできた。ぶっきらぼうでいつも怒ったような表情をしていたお父さん。そんなお父さんの表情に隠された優しさに恋をした、明るくて笑顔を絶やさなかったお母さん。そして、一番僕のことを可愛がってくれた茉莉ちゃん。家に帰ってくるなり僕のことを大声で呼んで、丸まっていた僕を無理やり持ち上げることは嫌だったけれど、誰よりも一番僕のことを愛してくれた。みんな僕の大切な家族だった。きつともう会うことのない大切な家族。

浮かんできたのはそんな記憶の笑顔なのに、だんだんとその表情は滲んできてしまった。会いたいなあ。会いたいよ。僕の家族がいるあの家に、帰りたくてたまらなかった。でも、僕は家に帰る事が出来ない。寒さに震えて、空腹に襲われながらここで死んでしまうのだ。

聖夜の夜。人々が一夜を祝い、共にいられることを、今年もこの日を迎えられることを喜び称える日。そんな夜に、暗い通路、小さな命が消えようとしている。僕だけじゃない。いろんなところで、いろんな場所で、今日という日も変わらず誰かが産まれて死んでいる。あるいは、ある人は誰かを憎み、殺したいと思っているのかもしれない。ある人は大切な誰かを失って、失意のどん底に叩きつけられ

ているかもしれない。どこかでは、鳴り止まない銃声が響き渡っているのかもしれない。

みんながみんな変わらず平等で、今日という日も、こんな夜も、いつもと変わらず世界は廻っているのだ。だから今夜、ここで小さな死があつたってなんら不思議じゃないのかもしれない。僕の世界が終わるだけで、どこかでは違う世界が産声を上げるのだし、廻る世界は変わらずそこに在るのだから。僕の頭は何だか妙に澄み渡っていた。妙に冷え切っていたんだ。

そのうち、滲んでいた家族の顔は淡い光に包まれて遠くに遠くに離れていってしまった。寂しいけれど、悲しいけれど、不思議と心は凧いでいた。仕方ないことが世の中にはたくさんあつて、それはごく自然の当然のことなのだから。もう風は止んでいる。僕は目を開ける。

目の前に僕を冒険へと導いたあの光が浮いていた。

少し驚いた。身体が一瞬強張った。対して、光はそこにいることが当然だといわんばかりに目の前に存在している。

僕はしばらくその光を見つめていた。そして小さく語りかけた。やあ。君のせいで僕は死んでしまいそうだよ。全く、どうしてくれるんだい。不思議と恨みとか後悔とか、そんな感情はこもってなかった。

すると、光はまるで返事をするかのように何度か点滅した。“イエス”なのか“ノー”なのか、はたまた、“ごめん”なのか“ざまあみろ”なのか、僕には理解できなかつた。そうして僕らの会話は途絶えた。僕は光を見つめるだけで、光は何度か点滅を繰り返したけれど、僕には一つも理解できなかつた。

やがて光は肩を落とすかのように少しだけ高度を落とした。気を落としたのは何となく分かつた。でも、そこからの光の動きは、全く予想にもしてないものだった。

落ち込んでいた光は、急に僕めがけて突進してきた。冷たくなっていた鼻にぶつかったもんだから、とつても痛かつた。思わず声を

上げて飛び上がったほどだ。光は僕の目の前を右へ左へ、ちよこまかと飛び回り始める。まるで僕を馬鹿にしているかのようだ。ちよつと腹が立った。

こいつっ！

爪をあらわに飛びかかる。しかし軽くかわされてしまう。光は笑っているかのように小刻みに上下に動いた。かなり腹が立った。睨みつける僕。光は通路の奥へ、ふわふわと飛んでいった。時折止まって、上下に動く。僕のことを馬鹿にしている。あいつのせいで僕はこんな目に会っているのに……。さっきまではなかった怒りが、溶け始めた氷みたいにじわじわ込み上がってきた。どこにそんな力が残っていたのだろう。僕は猛然と光を追って暗闇の奥へと駆け出し始めた。一発ぶん殴ってやる。動機はただそれだけだった。

しかしながら、結局のところ、僕の怒りはそのはけ口を見つけることなく、僕の中でくすぶってやがて消えてしまうことになる。光はちよこまかとすばしっこく、僕の攻撃を見事にかわし続けたのだ。どうしてこんなことをしているのだろう。途中でそんなことも思った。奥へ奥へ、どんどん進む光は僕をへとへとに疲れさせてしまった。そしてついに最後の数歩を歩いて、僕は地面に倒れこんでしまった。ああ、もう限界だ。これ以上はもう無理だ。精根尽き果てた肉体は、寒さすら感じるものがなくなっていた。

息がおかしかった。ヒューヒュー鳴っている。まるで笛みたいだ。僕は他人事のように思う。あいつ、あの光のせいで僕は……。僕は最後の最後の力を振りしぼって、憎らしいあの光を視界に捉えようと思った。その時、僕の耳が冬の寒さに溶け込んだ、歌の存在に気が付いた。目に前に、柔らかなイルミネーションの光に包まれた教会が建っていた。僕はいつの間にか見知らぬ教会にまで辿り着いていたみたいだ。

そんな教会の扉の前に浮かんでいた光は、やがて空高く昇っていつてしまった。屋根の天辺に取り付けられた十字架の向こうに輝く満月を指すかのように。昇っていった光の代わりなのか、空から、

白い雪が舞い降り始めた。

幻想的な風景だった。聖夜という夜に、一番適切な空間にいるような気がした。そこで、僕の命は尽きる。何て運命的で、劇的で、普遍的なことなんだろう。僕の視界は次第に霞んでいく。でもまあいいか。仕方ないよね。しょうがないよ。炎はいうしか小さく萎んで消えてしまうものなのだから。出来れば、最後にお腹一杯のミルクを飲みたかったけれど。

世界は真っ暗になった。

「まだ、終わりじゃないさ」

そんな声が聞こえた気がした。

暖かい。空気が暖かい。とても心地がいい。何か僕を包んでくれる。なにが起こったんだろう。僕はゆっくり目を開ける。近くで暖炉の火がぱちぱちと薪を燃やしていた。僕は毛布に包まれていた。

ここはどこだろう。立ち上がり、辺りを見渡す。オレンジ色の柔らかな光が部屋の中を照らしている。柔らかな絨毯。どこかの建物の中みたいだ。僕はバスケットの中にいる。そこから数歩、歩く。よろけてしまう。近くに器に入ったミルクがあった。

「クロが起きた!」

近くから懐かしい声が聞こえた。目を向けると、茉莉ちゃんが立っていた。

あれ、どうして茉莉ちゃんがここにいるの？

謎が一杯の僕に茉莉ちゃんは駆け足で近づいてくる。分からないことだらけだけど、僕も出来るだけ茉莉ちゃんに近づきたいと前へ進む。だってすごく嬉しいんだもの。会えないと思っていたのに、目の前に茉莉ちゃんがいる。大好きな茉莉ちゃんがいる。

縮まる僕と茉莉ちゃんの距離。よろけてしまうこの足が憎らしい。きつと数秒、でも僕にとつては一時間にも思える時間を経て、僕は茉莉ちゃんの腕の中に抱え込まれたんだ。

「クロ。よかったクロ。心配したんだからね」

茉莉ちゃんはそう言って、僕をぎゅっと抱きしめてくれた。嫌なことだったのに、何だかとても気持ちよかった。茉莉ちゃんのおいがする。このままずっと茉莉ちゃんの腕の中にいたいと思った。

「わざわざ保護していただき、本当にありがとうございました。」
声が出た。お父さんの声だ。茉莉ちゃんが振り向く。お父さんが知らないおじさんに頭を下げていた。お母さんも一緒に下げていた。そのおじさんは天辺が寂しい頭を撫でながら、とんでもございませんと言葉を返していた。

「クリスマスイブなのに、寒い外で一匹倒れているのは可哀想だね。それも、教会の目と鼻の先に倒れてましたから。なあに、当然のことでしたまです。よかったですよ、猫ちゃんの目が覚めて」

そう言って、おじさんは照れ隠しなのか、大きな声で笑った。その笑い声は本当に大きくて、よく見たらおじさんも結構大きな身体をしていて、少し怖かったけれど、でも、その笑顔はとっても素敵で優しさに満ち溢れたのもだった。

おじさん、ありがとう。僕は茉莉ちゃんの腕の中でおじさんにお礼を言った。すると、僕の声に反応して、お父さんもお母さんもおじさんも僕の方を振り返った。

「また家族に会えてよかったね、クロ」
おじさんはそう微笑みを僕にくれた。お父さんもお母さんも安心してきった表情で僕を眺めていた。本当によかった。僕は心からそう思った。

不意に切ない音が、僕のお腹から響いた。みんなには聞こえてないみたいだ。僕は抱きしめてくれる茉莉ちゃんにお願いする。抱きしめてくれるのは嬉しいんだけど、僕お腹が空いてるんだ。ちよつと、放してくれないかな。

まあでもあと少しだけ。こうやって抱きしめられているのもいいのかもしれないと思う。ミルクはもう少しの辛抱だ。

「壊れた時計」by ジル

僕の世界は、白い雪に埋め尽くされていた。

そう、そんな日は、決して僕は嫌いじゃない。

緩やかに巻いたマフラーに首をうずめた君の、口元に当てたミットの隙間から漏れる白い息。

それすらも、僕の世界の一部であるかのように溶けていく。

つややかな黒髪を飾る雪の結晶。

それを払い落とす振りをする僕の手のひらにもっと首をすくめ、そして僕を見上げて笑う。

白い世界はさらに輝きを増し、僕たちを包み込む。

僕のコートと、君のダウンジャケットを通して、互いの体温を感じ取れるようになるまで身を寄せ合って。

「少し、距離を置かない？」

君がそう僕に告げたのは、君の友人に無理やりチケットを買わされた芝居を見終わって、半ば脱力気味の笑みを浮かべながら、スタバのようなシアトル系なんてないこの街では数少ないしゃれた内装のサ店で、スプーンにかき回されて渦を巻く生クリームを、見るでもなく見つめていたときだった。

「ん？ なんの？」

そういえば、来週はもうクリスマスだ。そんなことを僕は考えて

いた。君と迎える、三回目のクリスマス。それが過ぎれば正月。そしてバレンタインデー。僕の誕生日。春休み。ゴールデンウィーク。夏休み。君の誕生日。僕が彼女に告白した日。君が僕に答えをくれた日。そしてまたクリスマス。

君と付き合い始めてから、当たり前のように繰り返されてきたルーティン。

「あなたと、私の、よ」

そのとき僕は、笑っていただろうか。 たぶん。

だけど、それ以外のどんな表情をしたらいいのか、分からなかったんだ。

泣くには、僕はまだ君と過ごした日々之间的感情を引きずっていて。

怒るには、君の言葉が僕の心に届くための時間が不足していて。

そして呆れるには、君の言葉は重すぎて。

「じゃあ、ね」

呆れたのは君のほうだったんだろっな。もしかしたら、怒ったのも君のほうかもしれない。だけど君は泣きもしないで、去年のクリスマスに僕が贈った指輪を薬指から抜くと、それをテーブルに置いて店を出て行った。

ガラスのテーブルがピンクゴールドのリングとキスをする音だけが、僕の耳の中に残っていた。

どうして？ その疑問が頭から離れたことはなかった。予兆はあったのかもしれない。あまりにも、いつもそばにいたから、君が僕にとって特別な存在ではなくなった、そのせいかもしれない。だけど、僕にとって特別ではない、それこそが特別であるということの

証だったのではないのか。多分違つのだろうな。それはきっと、僕の甘えだ。

どうして？

僕に分かるのは、その疑問に答えを出す方法だけだった。

とても簡単なことだ。

君を追いかけて、それか君に電話して、それとも君にメールを送って、訊けばいいんだ。

どうして？ って。

でも、僕はその簡単なことよりも、その疑問を抱き続けることを選んだ。

選んだ？

そう、その疑問を抱き続けている限り、僕は君とつながっている気がしていたから。

(どう？)

冬が始まる前に、君がおどけて耳元に飾って見せたイヤリング。クリスマスに彩られた店先で、君に送るつもりだったそれを見つめる。タウン誌のクリスマス特集ページを開いて、君が喜んでくれる店を探す。

そして、君が見せてくれるはずだった笑顔を思い浮かべて、僕のクリスマスが終わった。

君は何をしていたんだろう。もしかしたら、僕ではない誰かとも過ごしていたのだろうか。

でも僕は……

僕の部屋、僕の体、僕の耳、僕の記憶、僕の意識、無意識。そこ

に残る君の匂い、君の感触、君の姿、君の意思、そして君の気配とともにいつもいたんだ。

そして今、君の存在が薄まっていくのにこれ以上耐えられなくなつて、こうしてメールを打っている。

君と話したい。

君と見つめあいたい。

もし許されるなら、君を抱きしめたい。

距離を置くことで、君がどれほど大切な人だったのか、僕は分かったよ。

だから、今年もまた、二人で新しい年を迎えないか？
午後八時、いつもの場所で待つてる。

僕の世界は、白い雪に埋め尽くされている。

君の部屋から見下ろせる公園は、夕暮れ前から降り続けている今年何度目かの雪で覆われていた。

子供たちが作ったときは、きつと土の色に汚れていたはずのベンチの上の雪だるまも、今は白いコートに包まって、暖かそうだ。

七時五十分。

僕は、君の部屋を見上げる。五階建ての学生用マンションの四階の角部屋、そこに君はいる。ベージュのカーテンを通して、暖かな明かりが漏れている。

僕はコートのポケットに手を入れて、マフラーに耳まで顔をうずめながら、それを見上げている。

時間にうるさい君は、待ち合わせの五分前になると、部屋を出る。

部屋の明かりが消えて二分後には、君は小走りに僕の方へと走ってくるはずだ。

七時五十五分。

君の部屋の明かりは、まだ消えない。僕の吐く白い息と、降り続ける白い雪が、僕と君の間にあり続ける。

七時五十八分。

去年の僕の誕生日に、君が贈ってくれたペアウォッチは、容赦なく時を刻む。君の部屋のカーテンに、影が映り、揺れる。

部屋の明かりは、まだ消えない……

分かっているよ。

僕は、腕の時計を外すと、小さな雪だるまの、頭の上にそっと置いた。時計の針は、ちょうど八時を指していた。

分かっている。僕に足りないものがなんなのか。

僕の世界は、白い雪に埋め尽くされている。

君はそれを溶かそうとしてくれていたのだろうと思うよ。

だけど、君が残した足跡は、きつといつか、雪に埋もれて消えてしまう。

明日になれば、僕がいた跡なんか、この公園からきれいに消えてしまうように。

そういえば、君に言ったことはなかったかもしれないな。

僕は、公園から出て、君の部屋を最後に振り返った。

「愛していたよ」

その言葉は、雪に散らされて、虚ろになった。

その雪を溶かすほどに熱い想いを、僕は抱き続けることが出来なかった。

そして、僕の時計は、雪の下で凍えて、壊れてしまうのだろう。

二人の時間が、もう同じように刻むことはない。

(f i n)

「魔性のこたつ」by名無し

商店街の隅にある古ぼけた店。

木造の薄暗く埃臭い店内に、二人の男が商品を前にして立っている。

「こいつが？」

30代後半の髪を短く刈り込んだ男が、そのいかつい顔をもう一人のほうに向けた。

「そう、こいつだ」

残り少ない白髪が側頭部に少し残っている老人は、丸いサングラスの奥で男をちらりと見ると、怪しげなどじょう髭を引っ張りながら答える。

「これが……魔性のこたつ」

男は一見普通に見えるこたつを薄暗い情熱をたたえた目で眺める。

「ひっひっひ、今までに何人も人間がこいつの所為で命を落としている……お前さんにぴったりだ」

老人の上品な笑い声が店内の空気をよどませる。

男はこの老人があまり好きではなかった。しかしその老人の「いわくつきのもの」を探し出す能力は男にとって必要な物だった。

「そいつらはどんな死に方をしたんだ？」

昼だというのに日の光の届かない店内で、薄闇の圧力を感じながら男は尋ねた。

「ひっひ、おまえさんも好きだね」

老人の笑い声がなんとなくくぐもって聞こえる。

「最初の奴は、このこたつで寝たまま死んだ。次の奴は寒い日の夜、こたつに入って寝たまま死んだ。その次は、一人寂しくこたつに入って寝たまま死んだ。そして」

「全部同じなような気がするんだが」

言葉を途中でさえぎられた老人は、少し不機嫌な顔をして男を睨んだ。

「まったくせつかちだの」

男は老人を無視して言葉を継いだ。

「確かに妙なこたつだな。ところで死因は分かっているのか」

「ひっひ、寿命」

「せいっ！」

「ぐほっ！」

男の拳の形をした突っ込みが老人のテンプルにクリーンヒット。老人はよろけて片膝をついた。

「ひっひひ、まあ待て。こんなに立て続けに死んでいるのはおかしいと思わんかね？」

頭部が右斜め45度に傾いた老人の言葉に、男は自分の顎をなでた。

「……確かに。するとこれは死を呼ぶこたつか」

「ひっひっひ、そうそう。まさに死を呼ぶこたつ」

老人の陰鬱な顔に愉快そうな表情が浮かぶ。

「おそらくこのこたつの内部には、怒りが充満しておるのだろう。」

おこたが怒った、なんつってな」

「ふんっ！」

「げふうっ！」

男の蹴りの形をした突っ込みが老人のストマックにクラッシュ。老人は床に大の字に倒れた。

「げほっほ。ひっひひ、短気だの。それでどうするね、買うかね？」
老人の丸いサングラスの奥の目が怪しく光る。

男は不審という文字が読み取れそうなほどいぶかしげな表情をしていた。

「最後に聞きたいんだが」

「なにかの？」

「死んだ連中の素性だ」

老人の丸いサングラスの奥の目が怪しく光った。

「素性？ 最初の奴は丸々と太った鼠で、次の奴は卵を尻につけたゴキブリで、三番目は」

「滅殺!!」

「んふうっ!!」

男の殺意が店を揺るがし、床板を震わせる。老人はきりもみ回転しながら店の奥へ消えていった。

「また来る」

男はそれだけ言うと、崩れかけた戸を蹴り飛ばして出て行った。後に残されたのは……魔性のこたつ。

「白の桜の木の下で」by ジル

しんと冴えきった空気の中、月の光が、青く地上を照らしていた。風すらもその声をひそめる中、きしり、きしりと雪をふむ音だけが、そつと雪に覆われた地面を伝い降りていた。

緩やかな斜面を、雪にも負けぬくらいに蒼い素足が上っていく。足の運びにゆれる裾、両手でつかんでしまえそうなほどに細い腰、まだ柔らかな曲線を描いてはいない胸、ノースリーブの肩から伸びる腕。

今が初夏であるならば、なんら違和感のない格好をした少女。

少女は、一步、一步、丘を登ってゆく。

彼女がおこした雪の波紋だけが、彼女の後ろに残されてゆく。月明かりの下、なおも黒い彼女の髪が、一步、また一步、揺れる。

もう、どれくらいそうやって歩き続けているのだろうか。もし彼女が振り返れば、眼下に広がる暗い平野まで、途切れることなく続く黒い線を見ることができらるだろう。

しかし少女は振り返ることもなく、進む先を見上げることもなく、ただ一步、一步、足を進めてゆく。

そんな少女の歩みも、ついに終わりを迎える。足を止めたのは、まるで屍衣に包まれた墓標のように、あちらこちらから雪の塊が天へ向かって手を伸ばす、そんな場所だった。

少女は初めてゆっくりと振り返り、そして初めて

顔を上げた。

そして初めて

瞑っていたまぶたを開いた。

月の光が、少女の顔を蒼く照らす。硬く突き固めた雪のような肌が、その光を淡く反射する。まぶたの奥の、黒曜石をはめ込んだような瞳。氷から削り出したような、冷たい美しさをたたえた鼻筋。無彩色の世界で、ここだけ彩りを見せる口元。

その硬く閉じられていた唇が、わずかな隙間を空ける。そこから、ふっ、と吐息が漏れる。目が再び閉じられて、代わりに口が大きく開かれた。

少女は、身体中で大きく息を吸い込んだ。

さくら さくら

凜と澄んだ声が、その小さく細い体からあふれ出した。その歌声は、冷たく凍りついた風を、優しく震わせ、溶かす。

のやまもさとも みわたすかぎり

彼女を包む世界が、変貌してゆく。はだしの足元を埋める雪がゆらりと揺れて姿を隠し、代わりに緑に萌える若草が、よみがえった風になる。その変化は、同心円の中心に彼女をおいて、世界に広がってゆく。

かすみかくもか あさにににおう

若草の穂先に点った露から光があふれ、わきたつ。無機質に透き通っていた空気が、柔らかな澱みをはらんで輝く。振り上げば、空はいっつしか青く、頭上にあった月は、まるで太陽のようだ。

さくら さくら はなざかり

そして、少女は笑った。淡く甘い香りが彼女の心をさらに浮き立たせる。白かった彼女の頬は、今は桜色に染まり、そして。

満開の桜の木が、少女を取り囲んでいた。

優しい風が、彼女の髪をなびかせる。風上に顔を向け、心地よさそうに目を細めた少女は、両手を天に広げて全ての光景を抱きしめようとするように、くるくると舞った。

西暦2××8年。局地的な紛争に端を発した戦争は、すでに末期的な相を示していた人口過剰と、慢性的な食糧不足からくる飢えに苛まれていた人々の心に、撃針を打ち込んだ。

すでに化石燃料は枯渇して久しく、わずかな代替エネルギーも、一部の特権的な国家の享樂を満たすために、そのほとんどが費やされていた。

そのころには、もう世界の八割を超える国々が、核兵器を持っていた。まるでいったいに引き絞られた弓のように張り詰めた抑止力は、限定的な使用という名目のもとに解き放たれた。

さくら さくら

ざんと風がなる。無数の花びらが、少女の上に降り注ぐ。白いワンピースの裾がなびき、歌声に、嬉しそうな笑い声が混じる。

やよいのくもは みわたすかぎり

舞う花びらはますますその勢いを増し、少女の周りで乱舞する。
見渡す限り桜色の世界の中で、少女は一人歌い、踊る。

かすみかくもか においぞいずる

花びらの隙間から、眼下の景色が見渡せる。やはり桜色に染まった霞をとおして、これも桜色に埋め尽くされた平野がのぞく。

いざやいざや みにゆかん

そのとき、桜の花びらのトンネルが、ぎゅうと音を立てて窄まり、そして、発散した。少女は、胸の前で花びらを受ける形に手のひらを開いたまま、動きを止めた。花びらは淡く光を滲ませながら、漂白されてゆく。

少女は哀惜を双眸にたたえ、周囲を見渡す。花びらは今、ふぶく雪の欠片に姿を変え、桜の木は、花の代わりに白い雪の結晶を、枝々に咲かせていた。

少女のまなじりから、一筋の涙が零れ落ちる。それは、景色と同じく色を失い行く頬を伝い落ちながら冷たく凍りつく。最後に、桜に向かつて少女は手を差し伸べようとし、そして、花びらのように薄れて消えた……

凍えるような宇宙に一人残された『ガイア』は、夢を見る。
己の育んだ生命が、その生を謳歌していた輝かしい時代を。

それは、泡沫うたかたのように浮かんでは、世界を照らし、そしてはじけて消える。

再び地上が、新たな生命で満ち溢れる未来そのときまで。

光を失った月のもとで、白く結晶化した桜の木だけが、少女の残した足跡を見下ろしていた。
それもまた

(f i n)

「螢火」 by へボ

雲が空一面に広がっていた。白く白く、その内に仄かな灰色を混ぜ込んだ雲は、風に流されているのか、それとも静かに佇んでいるのか分からないくらいにのっぺり広く空を覆っていた。

風が吹く。強く吹く。雲を見上げていた私は思わず目を閉じ首を竦めた。冷たい冷たい北風が、私の側を通り過ぎていく。逸れた親を探す子どものような心細さが不意に頭をもたげた。冬はいつだって人を孤独へと誘う。

雪はいつ降るのだろう。ふと思った。もう随分と寒くなってきたのに、天気予報はいつも積雪の恐れがありますと繰り返すばかりで、肝心の雪はまだ一度も降っていない。早く降ればいいのに。少し、もどかしくなる。

風が止む。ゆっくりと目を開けた。目の前には変わらず、私以外に誰もいない並木道がまっすぐ延びている。秋には輝くばかりの黄色の葉を大きく広げていたイチョウの木々は、今ではそのとがった枝を虚しく空に向かって突き立てているだけだ。色褪せた並木道は閑散とした寂しさを漂わせながら冬を耐えている。薄く延ばした灰色が並木道に被さっているかのようにだった。

そんな景色をぼんやりと眺めてから、私は再び歩き出した。目的地はもうすぐそこだ。大切な人のお墓。なかなか来ることが出来なかった場所。私は黒のロングコートのポケットに手をつ込んで、のんびりするわけでもなく、急ぐわけでもなく、歩いていく。こつこつと靴が鳴り響く。音は、乾いた冬の空気の中に溶け込んで消えていく。時折吹きつける強い風が木々の間を駆け抜けていった。

私は誠治くんのことを思い出していた。いつも片手にスケッチブックを抱え、目に映る景色を、輝く光景を描き残そうしていた誠治くんのことを。

公園で、河川敷で、時には人通りの多い道に面した喫茶店で絵を

描いていた彼。そのスケッチブックには、一体どんな絵が描かれているのだろうと、彼の姿を目にする度に思った。スケッチブックと描く景色との間を何度も行き来する彼の表情を見てみると、なんとなく描かれている絵を見たくなくなってしまふのだ。

それはきつと、彼の表情がよかつたからなんだと思う。誠治くんが絵を描く時、その表情はいつも生き生きしていて、目が輝いていて、彼の姿を見ているだけで自然と口がほころんでしまふような、元気を分けてもらえるような表情をしていたのだ。

そんな誠治くんと私が互いの名前を知ったのは、麗らかな陽射しが穏やかに地上を照らしていたある春の休日のことだった。私が中学生になって初めての春だった。気持のいい春の太陽に誘われて当てもなくぶらついていた私は、誠治くんと小さな公園でばったり出くわしたのだ。かなり驚いていた。彼はいつものようにスケッチブックを前に熱心に風景を描いていた。

「何、描いてるんですか？」

そつと近づいて、そう尋ねてみた。誠治くんを見た瞬間に、何だか声をかけたくなっていたのだ。と言っても、話したこともなければ、こちらが一方的に知っていただけの人に声をかけるというのは、かなり緊張することだった。文字通り、心臓は飛び出るんじゃないかと思うほどに高鳴っていた。普段はそんなことはしないはずだったのに。春の陽射しが私をちよつと大胆にさせていた。

彼はスケッチブックから目を上げると、私をじつと見つめた。それからまたスケッチブックに視線を戻してしまつた。ちよつと落ち込んだ。ため息も出そうになった。でもそんな時、おいでおいでと招く彼の手に気がついた。周りの景色が少し明るくなった気がした。それが私が誠治くんの絵を目にした初めての時だった。遊具も少ない、芝生なんてない、でもちよつとだけ光り輝いているかのような小さな公園がスケッチブックの中に広がっていた。見ているだけで楽しくなってくる気がする。そんな素敵な公園だった。

私は感嘆の声しか出なかつた。それ以外にその時の感動を私は表

すことが出来なかった。綺麗ですね、とか、うまいですね、なんて言葉は安っぽくなってしまふと感じていた。私は描かれた公園を食い入るように見つめていた。

そんな私の側で、誠治くんは恥ずかしそうに頭を掻いていた。親しくない人に対しては寡黙になつてしまふ人だったから、気まぐれで見た絵に対する私の反応にかなり困つてしまつていたので思う。けれど、彼は私に他の絵も見るかどうかが尋ねてくれた。私は喜んで頷いた。

スケッチブックには様々な景色が描き込まれていた。木漏れ日が差し込む深い森林。慌ただしさの中に沢山の無関心が詰まっている駅のホーム。煌めくせせらぎの側で咲く満開の桜。水性の色鉛筆の優しいタッチで描かれたそれらの景色には、それぞれがそれぞれの光が宿っているかのようにだった。ああ、やっぱりこの人が描く絵なんだ。今まで目にしてきた彼の姿と絵が私の中で力チリと合わさつた。絵の隅っこに書かれたサインを見て、初めて彼の名前を知つた。絵を見終わった私は、感動のあまり誠治くんに今まで何度か目にしたこととか、スケッチブックの中身が気になっていたことなどを一気にまくしたててしまった。途中で自己紹介もしてないことに気がついた。

「あ、私、栞つて言います。今年中学生になりました。……あの、その、誠治つて名前なんですな……」

喋りながら、だんだんと声は萎んでいってしまった。舞い上がったいた自分が恥ずかしくて堪らなくなつた。こっそり見上げると、そこには困つたように笑う彼の表情があつた。その表情の中にどこか心地よい親しみがあるのを感じた。ちょうど目が合った。何だかわけもなくおかしくなつてきて、ちよつとだけ笑ってしまった。そんな私を見て、誠治くんは今度こそ満面の笑みを浮かべてくれた。

それから私と誠治くんは度々会うようになった。ちよつとした付き合いが始まつたのだ。気持のいい春の一日の出会い。私たちは幸せだったんだと思う。

そんな日からもう六年が経とうとしている。今私の目の前には誠治くんのお墓がある。物言わぬ石の造形だ。何度と会って、他愛ない言葉を交し、一緒の時間を過ごした誠治くんが眠っている。私が高校生になって、変わった環境に流されて、しばらく誠治くんと会わなかった間に彼はここまでやってきてしまった。

その事故を私が知ったのは、高一の冬。凍てつく空気が肌に突き刺さるかのように寒い日のことだった。酒気帯び運転の車に撥ねられた彼の十九年は、あっけなく終わってしまったのだ。

出会ってから二年目の冬、冷たい北風が強く吹く、ちょうど今日のような日に、誠治くんと交した会話を私はまだ覚えている。蛍の話だった。冬に現れる蛍の話。

「知ってる？ 蛍ってさ、実は冬にもいるんだよ。ん、幼虫じゃないよ。成虫。光る蛍がいるんだ。どこにだって、空から降ってくるんだよ。ふわふわふわちよつと光りながら。雪かあ。まあ、そうも言うね。でも栞ちゃんなら絶対見えるよ。冬の蛍。すつごく綺麗なんだ」

思い出したのは去年の今頃。校舎から外の景色を眺めていた時だった。その日、私は空から降り始めた初雪を見た。

誠治くんさあ、あれって、雪は雪でも初雪のことだったんだよね。初めて聞いた時はさ、くっさいこと言ってるよってあきれちゃったけどさ、あの雪を見てたら冬の蛍って言いたくなつたのも分かる気がしたよ。綺麗だった。でもさ、やっぱりかなり恥ずかしい言葉だったよね。思い出して、顔紅くなりそうだったもん。わーって込み上げるものがあってさ、叫びたくなっちゃった。

そう心の中で語りかける。絵の輝きを教えてくれた人に。通り過ぎてしまった大切な人に。

去年の秋、高校の文化展に私は一枚の絵を送った。その絵は金賞を受賞した。高校最後の夏に描いた、灰色の空から降ってくる初雪の景色。『蛍火』。そう名付けた。誠治くんが教えてくれた冬の蛍の絵。たくさんの想いを輝きに込めて、精一杯描ききった。描きき

って、涙が溢れそうになった。

誠治くん、ありがとう。あなたに出会えて本当によかった。おんなじ時間を過ごせた本当によかった。絵の輝きを教えてくれてありがとう。楽しかった時間をありがとう。たくさんのことをありがとう。

そして、さよなら。

合わせていた手を離して、私は誠治くんの墓前から立ち上がる。じゃあね、そう手を振ってお墓を後にする。墓前には一枚、白いハルジオンの花の絵を供えてきた。

私はこの街を出ようと思う。知らない街を、景色を、その輝きを自分の目で見てみようと思う。描き残したいのだ。誠治くんがそうしていたように。光を残したいのだ。見えない光を。美しい光を。ふと白いものがちらついているのに気がついた。見上げると、白く灰色を混ぜ込んだ一面の雲から、淡く光っているかのような雪が降ってきていた。

「蛍火……」

呟いて、少し笑った。熱くなった目頭を力強く拭った。ねえ、そこからも見えてるのかな。

私は再び歩き始める。強く、出来るだけ大きく。たぶんここにはもう二度と来ないだろうから。振り返らないために、前を向くために。

光はどこにでも隠れているのだから。

「ハッピータンバリン」by へボ

もう一度この目でしっかり見ておこう。そう決心したのは昨日の晩のことだった。私は今古い木造の校舎の前にいる。こげ茶色を通り越して黒一色になってしまったかのように見える木材で建てられたがった校舎だ。私の小学校六年間の思い出が詰まった母校でもある。

もう三十年以上も前になる。私はこの校舎に通っていた。友達と笑い合い、喧嘩して、日々を過ごしていた。今ではもう断片的にしか思い出すことは出来ないが、そのどれもがセピア色に染まって今の私を支えてくれている。ここで過ごした日々は、私にとって大切な宝物のひとつなのだ。

そんな思い出の場所を、私は壊さなければならぬ。

五年前、この校舎の老朽化を受けて新しく校舎が出来上がった。白を基調とした、コンクリートの校舎だ。子供たちは皆その校舎へ通うようになった。古い木造の校舎があまり好きではなかった子供たちにはかなり評判がいらぬらしい。二年生の息子が新築の校舎を私に自慢してくれたことをまだ覚えている。なんとも複雑な気分だった。

木造の旧校舎は廃校となった。何とかして使用しようと、いくつか用途の候補があがったがどれもまとまらなかつた。最大の問題は維持費。この先維持するには修復が不可欠だったのだ。いつの間にか旧校舎の用途は話し合われなくなれてしまった。

そんな所へ、とある企業がマンションを建てる計画を打ち出した。その土地一帯にいくつかのマンションを建てるという、大掛かりなものだった。市から土地を購入した企業は、周辺住民との交渉も上手に行ったため、手始めにこの校舎を壊すのだという。数年後には、新しい小学校に通う小学生を持つ家族がたくさん住むようになるのだそう。この町から昔を思い出すことの出来るものがどんどん消

え去っていくのが、少しばかり悲しい。

私は出来ることならこの校舎を壊したくはない。用途がなくなつた校舎を利用しようという計画が持ち上がった度に、賛成してきたのだ。しかし、会社がこの校舎の取り壊しの仕事を受けた。私はその責任者となつてしまった。嫌な仕事だ。辛い仕事だ。だが、仕事はこなさなければならぬ。私はこの校舎を壊さなければならぬ。

だからその前に一度、思い出の場所を見ておきたかった。これから破壊する場所を、仕事の責任者としてではなく、この場所を卒業したひとりの生徒として見ておきたかったのだ。

空は高く青く、冬だというのに風もなく、春のように暖かい。私は一步、校舎へ向かつて歩き出した。今日が本当に最後の登校日となる。

玄関は、当たり前というべきか、しっかりと施錠がしてあった。私はポケットから鍵を取り出し、戸を開けた。快く鍵を貸してくれた市役所の役人に感謝した。

校舎はうっすら積もつた埃と滞つた空気に満たされていた。日が差し込んで空気が温まつたのだろう、心地よい温もりが私を迎えてくれた。倉庫に仕舞い込んだひとつひとつ思い出を探し出すように私は校舎の中を歩いていく。

友達と馬鹿みたいに走り回つた廊下。二段飛ばしで駆け上がった階段。箒でちゃんばらをしていて叱られた教室。野球をしていて割つてしまった窓ガラス。まるで昔の自分がそこにいるのを眺めるかのように、次々と記憶はよみがえり、弾けていった。

やっぱり壊したくない。ここは代わるものがない、ただひとつの場所なのだ。そうかつて座っていた机をなぞりながら思った。椅子を引き、随分小さくなつてしまった机に向かってみる。しん、と静まり誰もいない教室に昔の同級生の姿が重なっていく。

誰かの席に集まつておしゃべりをしている女の子たち。どたばたと走り回っている男の子たち。ひとり机に座つて本を読んでいる子

もいれば、日直として黒板を消している子もいる。あの日々のみんなの声が聞こえてくるかのようだ。

でも、仕方がない。苦笑が自然と顔を覆い、私は俯いた。仕事なのだから。個人がどうこうものを言えることじゃないのだから。責任者なんだ、私は。ここを壊さなければならぬのだ。

顔を上げる。同級生の影は、いつの間にか消えてしまっていた。教室には誰もいない。この校舎には誰もいない。時代は変わるのだ。私は席を立つ。未練はもうない。最後にこの目で見ることが出来たのだから。そう言い聞かせ、教室を出て廊下を歩く。この校舎からは永遠に卒業するのだ。わびしさは苦笑となつて固執する私自身を笑っていた。

それが聞こえたのは階段を降りようとしていた時のことだった。廊下の奥から歌声が響いてきた。

私は驚いて振り返る。しかし、そこには無人の廊下が広がっていただけだった。空耳かと思しながらも、歌が聞こえた廊下の先をじつと見つめていた私は、今度こそ本当に心底仰天した。男の子がひとり、突き当りのT字になっている廊下を走り去っていったのだ。

私は信じられない思いでそこへ駆けていく。ここに子供がいるはずがない。では今日にした少年は一体何なのだ。男の子が走ったはずの廊下は、埃に覆われたままだった。足跡ひとつない。私は男の子が走り去っていった先を見る。ひとつだけ、教室の扉が開いていた。音楽室というプレートが懸かっていた。

内心怯えながらも、私はゆっくりと音楽室へ向かう。そういえば息子が旧校舎のお化けなる話を私にしてくれたことがあった。確かに音楽室がどうたらと言っていたような気がする。

部屋の前に着く。そつと中を覗いてみる。誰もいない。少し薄ら寒くなりながらも私は音楽室の中に入ってみた。教室の真ん中にタンバリンがひとつ落ちていた。

なんとも意味深なタンバリンだった。随分古く、小さなシンバルの部分は全て錆びてしまっている。木枠も日に焼けて色褪せている。

しかし不思議なことに埃に塗れていないようである。先ほどの足音と笑い声、そして少年の秘密が全てここに詰まっているかのように思われる。

少し恐ろしくはあるものの、私はタンバリンを拾うことにした。気になったことは確かめてみたくなる性格なのだ。

膝を付き、そっと手を伸ばす。鼓動が早くなっているのがよく分かる。じわりじわり縮まる距離。ええい、なるようになってしまえ。私は覚悟を決め、タンバリンを手に取った。

瞬間、脳裏に不思議な映像が流れ込んできた。子供たちの後姿。聞こえてくる歌声。どうやら映像は音楽室を見ているらしい。視点は少し高いところから。響くりコーダーの音色。教室から出て行く子供たち。静かな教室。新しくやってくる子供たち。変わる歌声。背の高さ。時々激しく上下しながら、振動する映像。

タンバリンの思い出だ。このタンバリンの。そう自然に気が付いた時、声が聞こえた。幼い男の子の声だった。

『どうしてみんな来なくなっちゃったんだろう。あんなに楽しかったのに飽きちゃったのかな』

周りには誰もいない。私しかない。けれど聞こえた。タンバリンの声はつきりと聞こえたのだ。

私は立ち上がり、手にしたタンバリンを見つめた。見れば見るほどに古臭いタンバリンだった。だが、こいつは何も知らず、何も知らされずただみんなを待っていた。廃校になり、笑い声も足音もしなくなった学校の音楽室で、楽しかった日々を思い出しながらひとり待っていたのだ。誰かが来ることを。また歌声が響くことを。

「馬鹿だなあ」

そう呟いてしまった。もうここは取り壊されることになったというのに。子供たちはすっかり新校舎を気に入ってしまったというのに。私はタンバリンをそっと抱きしめていた。

形あるものはいつかその姿を消す。必ずその時はやってくる。積み重なった思い出もそうなのだろうか。違うような気がする。記憶

は伝えられるし、誰かの中で生き続けることが出来るからだ。

ならば、この校舎に詰まった記憶であっても、たとえそれがものに宿った記憶だとしても残り続けるのではないだろうか。

冬の日は短い。車に戻った私は、次第に深くなっていく夜空を眺めた。やはり夜になると寒くなってくるものだなあとしみじみ思った。

今私の車の助手席にはタンバリンがある。音楽室にあったタンバリンだ。輝いていた思い出をたっぷり詰め込んだハッピータンバリンだ。

最後の登校日に学校の備品を盗んでしまったのだが、まあ誰も文句は言わないだろうと思う。言ったとしても返す気はない。これだけは返さない。タンバリンは新校舎に送るのだ。それが一番だと思う。

「お疲れ様でした」

そう校舎に別れを告げて、私は車を発進させた。

幾億年も夜空を照らす月が、私たちを照らしていた。

「音のない電話」by へボ

お湯がたぎっている。ぐらぐらぐらぐらと。胴鍋の底で百度に達したお湯が上昇し、絶え間なく表面に盛り上がっている。山だ。熱湯の山が出来ている。

僕はそこに結構大胆に塩を加える。塩を飲み込んだ山は少しだけ小さくなる。けれどもそれも一瞬のことで、熱湯は再び沸騰する。山は消えるつもりなどさらさらないようだ。

そんな熱湯にパスタを入れる。食べるのは僕と姉さんの二人だけなのだけれど、一応三人分。両手で全部持つて、鍋の中の山にパスタを突き刺す。蒸気が掌に熱い。堪らず手を離れた。

自分たちを束ねていた力から開放されたパスタは、支えを失って一斉に散らばる。まるで早朝の朝顔のように鍋の中で開花する。その開き方は幾分か早すぎる気もするけれど。僕はそんなパスタたちを、菜箸を使って熱湯の海へと沈ませていく。今日の夕食はカルボナーラだ。

「そんなこと言ったって、彼はあんたのこと好きで大切だから心配してるんじゃない」

僕は鍋から顔を上げ、キッチンに面したりビングの小さなソファアに座る姉さんの方を見た。膝を折り、小さくなってソファアに座る姉は電話で話し中だ。クッションを抱えている。そう思えば随分と話し込んでいる。

「分からなくもないけどさ、でもそれってあんたが彼との約束すっぱかしたのが悪いんでしょ？ 自業自得よ。従いなさい」

誰かの愚痴を聞くというのはとても面倒なことだと僕は思う。こっちは何も関係なかったはずなのに、愚痴を聞いているだけで体力を消耗してしまう気がするからだ。言葉は心に響いてくる。結構大切なことだと思う。

けれども、姉さんはただ愚痴を聞いているだけではない。

自らの意見も伝えて相手を諭している。ああ、なんて面倒なことなんだろう！ 僕には到底出来そうもない荒業だ。姉さんのことを気の毒に思いながらも、僕はその気力に憧れている。

マツシユルムを刻む。食べやすいように薄切りに。続いてベーコン。今度は食べ応えがあるように贅の目切りに。まな板の側には既に切り終えた玉ねぎをまとめてある。我が家のカルボナーラはシンプルだ。

ソースを作る。フライパンにオリーブオイルを引き、具材を炒めていく。ベーコン、玉ねぎ、マツシユルム。ぱちぱちと油が撥ねる音がする。塩と黒胡椒で味を調えた。昔と比べたら随分手際がよくなったものだ。自分で自分に驚いたりする。

牛乳と生クリームを加える。熱せられていたフライパンが気持ちのいい音を立てて満たされていく。沸き立つまるやかな香りが食欲をそそった。

「……ヒロ。ヒロ！」

呼ばれて、顔を上げる。受話器を胸に当てて姉さんは聞いてきた。

「ねえ、ヒロだつて、部屋で女と二人きりになんかあったらセックスしたくなるわよね？」

どうしたらそんな話題になるのだろう。少々気になる。電話の向こうの人は誰かに強引に迫られたりしたのだろうか。少しの間を空けてから、僕は、時と場合によるよ、とだけ答えた。煮え切らない答えだとは僕自身、分かっている。

「うっそだー。何かっこつけちゃってんのよ」

姉さんの非難には、苦笑いで答えた。

チーズの準備をする。塊のままのパルメザンチーズとゴダーチーズ。小さく刻んだゴダーはそのまま白濁のソースの中に、パルメザンは鍋の上で削る。たっぷりたっぷり。僕はチーズがいっぱい入ったカルボナーラが好きだ。仕上げにモッツァレラまでトッピングするつもりだから、これはもうチーズパスタなのかもしれ

ないと少し不安になったりする。

まあ、気にしないで置こう。

パスタを見る。沸騰する熱湯に、パスタが踊っている。ぐるぐるぐるぐる。底から頂点まで上がって、また沈む。目が回るだろうな。そんなことを考えた。

ひとつ掬い上げ食べてみた。うん、アルデンテ。すぐに全部取り上げた。ソースと絡める。三人分のパスタを一気に扱うのは結構力が要る。僕は懸命にパスタの塊をソースの中でほぐす。次第に一本一本にソースが絡まり始め、全てのパスタがクリーム色の衣を纏ったのを見て僕は満足した。

皿に盛る。仕上げにモッツアレラチーズと卵黄を添えて、その上から黒胡椒を削った。今夜はハーブはなしだ。その出来を見て、僕は一人うなずく。結構な出来上がりだ。僕の腕もかなり上がったものだ。

姉さんに声をかける。まだ会話は終わっていないようだった。僕はテーブルに皿を運んでいく。一緒にサラダとコンソメスープも準備した。先に席に着く。姉さんを見て再び声をかけた。姉さんは手を上げて僕に合図をくれた。

「ごめん、また後でね。ああ、もう。悪いと思ってるわよ。ちゃんと後で聞くから。ほんと。うん。じゃあね」

電話を切ってから盛大なため息が姉さんの口から漏れた。ゾンビのようにゆっくりと歩いてくる。よほど電話で疲れたらしい。お疲れ様である。

けれども、食欲というものはどこまでも素直なものだ。感心してしまう。姉さんは席に着くなり目を輝かせた。

「わあ、おいしそう。ヒロ、どんどん料理覚えるね。すごいよ」

そんな贅辞の言葉に僕は照れてしまう。姉さんは合掌しながら頂きますと言い、早速カルボナーラを頬張った。

「おいしいー！」

姉さんにはっこり微笑んでそう言った。僕も釣られて微笑んでしまった。

おいしいと、笑顔で伝えてくれるその言葉が、何よりも僕を嬉しくさせる。笑顔のためなら、これからもいろんな料理に挑戦したいと思えてくる。今度は何を作るうか。カルボナーラを頼張り僕は考えたりする。あ、今日のは格別においしいかもしれないぞ。自分でも驚いた。

そんなささやかな晚餐。僕と向かい合う姉さんの二人だけの食事。姉さんはさっきまで話していた電話の相手のことを僕に話してくれる。その子の恋の話。恋人のこと。正直愚痴に付き合いきれないこと。でも、本当はいい子で最終的には放つて置けなくなつて関わつてしまう自分のこと。姉さんはなんとも感情豊かに話してくれる。

僕はそんな姉さんの表情を見ると眩しくて堪らなくなる。思わず目を細めてしまふくらいだから、だいぶ重症なんだと思う。姉さん病だ。眩しい姉さんを見つめることが出来ない厄介な病気だ。本当に困つてしまふ。

終始、姉さんは本当に楽しそうにしゃべり続けていて、僕はそれに相槌を打っていた。テレビは消えていて、音楽もかかっていない。部屋の明かりが白々しく照らす下で僕らは食事を取っていた。

終わらない姉さんの話を聞きながら、途中から僕の意識は段々と目の前にいる姉さんから、そのもつと奥にいる姉さんに移つていった。深いところで、もうずっと耳を閉ざして目を閉じて、逃げ隠れている姉さんのことを。

ねえ、姉さん。姉さんはその相手の人に会ったことがあるのかな。特徴は。年齢は。髪型はどんなのかな。家族構成は。好きな食べ物と嫌いな食べ物。いつから友達になったのかな。僕は溢れ出す姉さんのおしゃべりに耳を傾けながら、そんな疑問を幾つも投げかけてみた。もちろん心の中で、だけれど。

姉さん。僕は知ってるんだよ。本当は知ってるんだ。ずっと姉さんが話している電話の向こう側には誰もいないってことを。姉さんが使ってる電話のコードは、もうだいぶ前にコンセントから引き抜いてあるんだよ。姉さんの手でね。姉さんは姉さんの中の見えない誰かと会話している。

僕はよく考えてみる。姉さんが話し相手のいない電話で会話していることを。それが果てしていいことなのかとか幸せなことなのかとかを、何の役にも立ちそうにないちんけな脳みそで考えてみる。

一時期の、極度に人を恐れて、誰かと顔を合わせることを嫌い、会うことすら拒んだ頃と比べれば、電話はいいことなんだと思う。かつて、何が姉さんをそこまで追い詰めたのかは知らないし、分かりもしないけれど、笑ってくれるだけで安心できる。でもそれが幸せなことなのかどうか。僕はずっと答えを保留してきている。多分幸せではないのだろうとは思っている。

「全く、あいつにはやっぱり私がいないと駄目なんだよね」
そういつて微笑む今の姉さんに、あの頃の暗闇はない。

明るくて優しく、押しには弱い女性が僕の目の前にはいる。でも、それでいいのだろうか。姉さんは僕と一緒に外を出歩くことも出来るようになった。でも、それは幸せなことなのだろうか。

ねえ、姉さん。姉さんは今、幸せかい？

「ああ、早く電話してあげなくちゃ。あいつ何かとうるさいんだよね」

ご馳走様でした。そう言っつて姉さんはまた受話器を手に取りソファーに腰掛けた。見ればカルボナーラは綺麗に食べきってしまったっている。そう言えばおかわりもしていた。僕は食器を流しへと持っていく。

重ねた食器と調理器具に流水を注ぐ。フライパンは水に浸していなかったから、固まったソースが取りにくくなってしまっていた。これは骨が折れるかもしれない。

ふと見上げると、ソファアの上の姉さんは少しイライラしているようだった。電話が繋がらないのかもれない。もともと電話は繋がってはいないのだけれど。姉さんは指で膝を叩くのを止めて、ふと宙を眺めた。遠く、視線の先にある暗い窓の外よりも遠くを眺めているかのような瞳をしていた。

不意に僕は、何の前触れもなく、全てを理解した。

「あー、もうすぐ修の二回忌か……」

呼び出し音が続く電話を耳に当てながら姉さんは呟いた。その瞳は目の前に広がる空間の奥底を眺めているかのようにぼんやりとしている。僕はその瞳が何を見ているのか、今なら分かる。

「ね、ヒロも来てくんないかな、弟の二回忌。あの子に私の彼氏紹介してあげたいんだ。ここまで強くなったよって」

振り向いた姉さんは少し柔らかく、女性らしくなっていて、どこか悲しそうだった。僕の胸がズキリと痛む。

「ああ、もちろん」

そう彼は答える。僕の知らない声だ。低くて、でも温かみがある声だ。姉さんはそんな彼の答えにも寂しそうに微笑む。ごめんね。垂れ下がった眉が語りかけていた。

姉さん、僕はここにいますよ。ずっと姉さんの側にいるんだよ。

そんな想いが届くなんてことは、もうあの日からないのだけれど、僕は思わず叫んでいた。頬を伝う涙に気が付いたのはどちらが先だったのだろうか。僕も姉さんも涙を拭いた。

「ありがとう」

姉さんが笑顔になる。僕も笑顔になる。でも二つの笑顔には異なる二つの感情が込められている。いつの間にか繋がるようになっていた電話は、しかし今はまだ繋がっていない。

「うさぎと兎と卵」by ジル

一日の仕事が終わり、今日は何を食べようかなあっているんな料理を思い浮かべながら、ボロ事務所から出たそのときだった。

「よう、ミキ。飯食いにいかね？」

そんな男の声を聞いたのは。

よっしやあっ！ きたあ！

わたしは、心の中でガッツポーズを決める。

ほら、わたしってスタイルがいいわりによく食べるから。ギャル根っっているじゃん。あれをちよっと可愛くした感じ。見た目も、食べる量も。

だから、わたしに言い寄ってくる男たちは、みんな食べ物で釣ってくる。毎月食費が助かってます。

心の中でお礼なんぞを言いながら振り向いたわたしは、笑みを頬に貼り付けたまま凍りついた。

幸彦かよ。ダメ。こいつだけは無い。

そんなわたしの心中も知らず、こいつは肉まんを二つくっつけたようなほっぺたを震わせながら、グフグフ笑っている。

大体、デブってわたし嫌いな。食べただけ脂肪になるって、なんて貧乏性。食べたらず。こっじゃなくっちゃ。

ギャル 根より可愛いぶん、わたし味と男の好みはうるさいのよね。いや、あの子の男の好みは知らないけどさ。

「そうねえ。今日は兎料理を食べたい気分かなあ。それだったら付き合っただけでもいいよ」

わたしって優しいわあ。むげに断ったら、かわいそうだもん。いくらデブでも。ここから半径二百キロ以内に、兎料理を出すお店が無いのはリサーチ済み。名づけてかぐや姫作戦。

自分で晩御飯を調達しないといけないのはちょっと痛いけど、こいつと食べるよりはまし。でも。

「いいよ。いい店知ってるから」

ちよつと困った顔をしたあとで、なにやら気色の悪い笑みを脂肪の上に浮かべた幸彦の答えに、わたしの心は大きく揺れた。

あるの？ 兎料理を出すお店。

鶏肉のように淡白で癖が無く、それなのにしっかりとうまみがつまった柔らかな食感、というもっぱらの噂。実はまだ食べたことないの。

食したいっ！ 心行くまで頼張りたい。そうよ。こいつの財布を軽くして、ダイエットに協力してあげるのも立派なボランティア。

「行こうっ！」

そしてわたしは、妙に運転席側に傾いた軽自動車の助手席に乗り込んだのだった。

結構きれいなお店じゃない。幸彦がこんな店を知ってるなんて、ちよつと意外。ていうか、こいつだけ浮いてる。

……ってことは、こいつの連れのわたしも浮いてる？ やだなあ。でも兎料理のためだ。がまんがまん。

注文は任せてくれっていうから、どんな料理が出てくるのか分からないけど。でも、周りのテーブルを見ると期待できそう。早く出てこい兎料理。

「お待たせいたしました」

よっしやあっ！ きたあ！

って……ハンバーグじゃん。てつきりシチューか何かだと思ってたのに。しかも小さい。

私は幸彦の顔をちらりと見る。相変わらずグフグフ笑ってる。う、食欲が失せた。この量でちよつどいいかも。

まあいいわ。兎料理には違いないんでしょ。気を取り直して、早速ハンバーグにナイフを入れる。柔らかい！

切り口にソースを絡めて、口に運ぶ。いい香り。ゆっくりと歯を立てる。やっぱり柔らかい……あれ？

わたしはちよつと眉をひそめた。確かに淡泊は淡泊なんだけど。淡泊すぎない？ 兎肉って、こんなもの？ そりゃ、確かに牛や豚とは違うけど。

もう一切れ。なんかこの味、覚えがある。もう一度幸彦を見る。

もう、笑ってんだか潰れてんだか分からない。

「ねえ、これって……豆腐ハンバーグじゃない？」

「そうだよ？」

うわ、さらりと認めやがった。ミンチにされたいのか。

「あんた、兎料理を食べさせてくれるって言ったじゃん」

「だから、豆腐ハンバーグっておからを使うだろ」

そう言つと、デブはテーブルの上に字を書いた。脂ぎってるから、何もつけてないのにちゃんと字が読める。

“卵の花”

「卵って、十二支で兎じゃん。嘘は言っていないよ」

なんだそりゃあああ！

「うつつうつつ、さぎだあ」

そのあとメニューの上から下までを注文して、ささやかな復讐心とお腹を満たしたのは、言うまでもない。

泣いてやんの。ザマア。

(f i n)

「幸せとほら吹き」byへボ

ほら吹きのセト。僕は近所の犬仲間たちからそう呼ばれていた。あることないこと、何でもかんでもとにかく大袈裟に言いふらす悪ガキだと思われてたんだ。

確かにその通りだ。なんたつて僕は毎日のように、僕を拾ってくれた亜美ちゃんを騙し続けていたんだから。雨だったあの日、ずぶ濡れだった僕を、目を真っ赤にしながら拾ってくれた亜美ちゃん。どうしてあの目を赤くしていたのか、僕には分からないけど、とにかく僕を拾ってくれた亜美ちゃんはとっても優しくかったんだ。

亜美ちゃんは、僕がちよつと具合の悪い振りをするときぐ心配してくれた。おろおろして、混乱しながらも声をかけてくれた。僕はお腹が痛い振りをしたり、脚を怪我してしまったように歩いてみたりした。その度に亜美ちゃんは困ってしまったって、泣きそうな顔になりながら僕の身体を丹念に調べてくれた。亜美ちゃんのパパとママにも相談したりして、時には病院にまで連れて行ってくれた。帰り際、いつもこっぴどく叱られるのだけは嫌だけど、でも嘘を吐くことはやめられなかったのだ。だって楽しかったから。亜美ちゃんは本気で僕を心配してくれたんだ。

犬仲間たちは僕をひどい奴だつて言っていた。主人を困らせる厄介な奴だつて。でもそんなこと知ったことじゃなかったんだ。僕と亜美ちゃんの絆は、みんなには分かんないのさつて思ってたから。これからもずっと、僕は袈裟なほらを吹いて亜美ちゃんを困らせて、時々病院に連れて行ってもらって帰りに叱られる。それでいいじゃないか。それなりに僕たちは楽しんでいるんだから。そう思っていたんだ。

でも、どうやらそれはそろそろ終わりらしい。

その日、また亜美ちゃんを困らせて満足して眠った昼、

僕は神様と出会った。眠って、夢の中でふと顔を上げたらそこに神様がいたんだ。白いタイツに、これまた白のアンダーシャツ。寒そうな頭に、浅黒いあざをいくつか浮かべたその老人は、右手になんだがいかつい杖を、頭上には金色の輪っかを浮かべて、目の前で浮いていた。どうしてそのおじいさんを神様かと思ったのかよくは分からないけれど、とにかく目の前にいるのは神様だったんだ。僕は寝た時の姿勢で顔だけ上げたまま神様を見ていた。

「セトよ、お前は今の主人に拾われたと言うのに、その恩を仇で返しておる。これはとんでもないことじゃ。このままではわしはお前を罰しなくてはならん。想像も出来ないような不幸をお前に呼び込まねばならん。そんなことは無論わしもしたくはない」

神様は途中幾度か咳をしながらそこまで話した。何とも威厳のない神様だと思った。それでも僕は、どうしたらいいのか聞いていた。僕自身、想像も出来ないような不幸がどんなものかは分からないけれど、そんなのは受けたくなかったんだ。神様はゆっくり大きく三回うなずいてからこう言った。

「嘘を吐くのを止めよ。主人を欺くことを止めよ」

僕はまるで水が溜まりきった獅子おどしみたいに大きくひとつうなずいた。そんな僕の反応を見て神様は満足したのか、にやりと笑ってこう言った。

「そうか。ならばこれから絶対にほらを吹いてはならんぞ。仮にもし一回でも吹いたものなら、お前の身には、想像も出来ないような不幸が押し寄せることになるからの。肝に銘じて置くように」

最後にそう残して、神様はすうっと消えてしまった。バィー。そんな古臭い捨て台詞を残して。

同時に目が覚めた。僕は寝る前の僕とはまるで別の生き物になったような気がした。よく分からないけれど、もやもやした不安があったからその瞬間からほら吹きを封印しようと思ったんだ。それは思った以上に簡単で、亜美ちゃんと僕の生活も根本的なところでは何一つ変わらなかった。ただ、僕の嘘がなくなった

だけだった。

だから、それからの日々は特に大きな波が来ることもなく、穏やかな風が吹く海上を航海するかのようにはのんびりとした日々となった。可もなく不可もなく、まあそれなりに。僕はたくさんの犬と散歩先で出会って、亜美ちゃんは僕の食事を自分で作るようになったりして、僕はそんな亜美ちゃんを困らせるようなことを極力しないように心がけて、亜美ちゃんは段々大きく綺麗になっていて、僕は年をとって、夏が来て秋が来て、雨が降って雪が降って、季節はぐるぐる巡り、何度目かの春が来た。

その間に僕の世界はどんどん狭くなっていったんだ。

窓の近く、開いた窓から入ってくる春風が寝転ぶ僕の身体をそっと撫でていく。柔らかな陽射しが射し込む庭先には蝶が二匹ひらひらと飛んでいて、その下にはちっちゃなたんぽぽがぼつちり咲いている。広がる青空には小鳥の歌声が響いていて、まどろみを誘う陽気が僕を包んでいるんだ。多分、外に出て力一杯走り回るととっても気持ちがいいんだと思う。今の僕には出来ないことだけだ。

僕の身体はいつの間にか、思うように動かなくなってしまうていた。最初におかしくなったのは目だったと思う。周りがよく見えなくなっていくんだ。だからさっき僕が見た庭の景色は、実際には見てないことになる。音と匂いと、過ごしてきた歳月が僕に庭を見せていたんだ。例えば十年以上この庭を見てきたんだ。目を閉じても、僕には目の前に広がる庭が見ることが出来ると思う。

僕は少し身体の位置を変えたくなくなった。でも、どこも動かない。動いてくれない。だから、ほんとはこんなことしたくないんだけど、近くのリビングでママと一緒にいる亜美ちゃんを呼んだ。もう大人になってしまった亜美ちゃん。彼女を呼ぶ声は小さく擦れて、鼻から抜けるような、気の抜けた声にならなかつた。

がたんと大きな音を立てて、亜美ちゃんは急いで近づいてくる。そして凄く心配そうに僕の顔を覗き込んで「ぼんやりとな

ら顔があることが分かる。本当はすっかり見たいのだけれど、それはもう出来そうにない)、声をかけてくれる。どうしたの? どこか痛む? あの日から変わらない、優しい声で。

その声と亜美ちゃんの顔を見ると、僕はとっても居心地が悪くなる。僕のせいで亜美ちゃんを傷つけているような気になるんだ。傷つけたくなんか、ないのに。でも、僕は少し身体的位置を変えたい。だから仕方なく情けない声でお願いするんだ。ごめんね、亜美ちゃん。身体向きを変えてくれないかなって。

亜美ちゃんは僕の言葉を理解して、そつと僕を抱えるとちょうどいい体制に僕をしてくれる。亜美ちゃんには僕の声が聞こえるのだ。聞こえるだけじゃない理解してくれているんだ。僕はそのことがとても嬉しい。尻尾がちよつとだけ動いた。

でも、僕の呼吸は、姿勢を変えてもらうたった、それだけのことだったのに少し荒くなってしまった。ありがとうと言いたいの、呼吸が辛くて、上手く、言えない。悔しい。情けなくなる。そんな僕の頭に、亜美ちゃんは掌を置いてくれる。ゆっくりゆっくり撫でてくれるんだ。

それが気持ちよくなって。心地よくなって。僕は堪らず目を細めてしまう。幸せが心の中に溢れ出すんだ。弾けてしまうんじゃないかって程に膨れ上がる幸せ。僕は出せない声の代わりに、頭の上に乗った亜美ちゃんの掌から伝えるんだ。ありがとう。ごめんねって。

亜美ちゃんの掌からはとっても寂しそうな心が伝わってくる。亜美ちゃんは凄く心配している。いつなんだろう。何か出来ないのだろうか。

もうすぐ僕は死んじゃう。明日か明後日か、もしかしたら今日の夜かもしれない。はっきりといつかは分からないけれど、多分もうちよつとで僕は死ぬ。もうちよつとで僕は亜美ちゃんとお別れしなきゃならなくなる。亜美ちゃんはそのことを怖がっているのだ。仕方のないことだけど、僕も結構そのことが辛かったりする。

辛い呼吸が恨めしい。食べても戻ってしまう胃袋が憎らしい。一日中、何だかほんわか暖かくて、かもすると寝てしまいうになる春の太陽に腹が立つ。

僕は死にたくない。もっと亜美ちゃんの側にいたいんだ。一緒に散歩して、駆け回って、時々怒られたり怒ったりしながら、亜美ちゃんにもっと笑っていてほしいんだ。

「でも、それは仕方のないことなんじゃよ」

どこかで神様が呟く。

「お前はもうすぐ寿命を終える。決められていた運命の期間に終わりが来たのじゃ。それは必然じゃ。抗うことは出来ない、逃れられない未来なんじゃ」

でも、僕が死んだら亜美ちゃんは悲しむんでしょ？ 泣いちゃうかもしれない。そんなの、ヤだ。

「お前の気持ちはよく分かる。じゃが、老い先のないお前にはそんなことを心配する意味はないんじゃないよ。死は何かを奪う。変わりに始まるものあるんじゃない」

それは深い悲しみじゃないの？

「そうかもしれない。それは辛い日々になるかもしれない。でも、そこから始まる何かがある。そして必ず終わりがあるんじゃないよ」

僕はしばらく黙っていた。神様はどこかに行ってしまったのか、もう何も喋らなくなった。

神様にもどうにもならないこと。それに僕は何か出来るのだろう。そんなことを考えた。どうせ何も出来やしないけど、考えていたんだ。何か出来るはず。そう願いながら。

だからなのか分からないけれど、唐突に僕は思いついたんだ。ここで死んでしまうのなら最後に一度だけ嘘を吐こうって。大丈夫だよ、まだまだ元気だよって、大切な亜美ちゃんに、僕を拾って育ててくれた亜美ちゃんに伝えようって。

貰ってばかりだった僕からの、最後のプレゼントを思いついたんだ。

「　　いいよ」

神様がそう言った気がした。

目を開いた。目を開いた？ あっ、そうか。いつの間にか僕は寝ちゃったんだ。気が付かなかった。頭の上にあつた亜美ちゃんの手との感触はどこかにいつてしまっている。遠くで誰かの話し声が聞こえた。

僕は目の前に広がる変わらない春の庭先をぼんやりと見ていた。二匹の蝶が迷路に迷い込んでしまった迷子のように舞っていて、その下にたんぽぽが二輪、寄り添うように咲いていた。

たんぽぽが二輪？

僕は目の前に広がる景色がよく分からなかった。どうしてか庭が見えるのだろうか。ぼやけていない。はっきりと目に見えているのだ。目覚める前まではほとんど見えなかったのに。

と、迷子の蝶が出口を見つけたかのように高く舞い上がった。釣られて首がなんとなく持ち上がった。あれれ？ 低かった景色が少し高くなる。春の庭がちよっと大きくなったような気がした。僕は未だに混乱していた。何やらおかしい。身体の調子がおかしい。

前足に力を入れてみる。身体がゆっくりと持ち上がる。後ろ足は勝手に立った。僕は自分で立った。寝たきりだったのに。立ててしまった。僕はようやくここで気が付く。僕は嘘を吐いているんだ。僕自身に。僕自身の身体に！

身体がむずむずする。堪らず全身を震わせた。背負っていたもの、近づいてきていたもの、逃れられないものはどこか空高く飛んでいってしまったようだった。それは多分、隕石みたいになつて後々僕に衝突するのだろうか。その時が僕の最後なんだと思う。

でも、それが何だというんだろう。今、僕はこうして自分を取り戻したんだ。最後の嘘を吐いたんだ。だから、僕にはしなきゃならないことがあるんだ。そうだろう？

リビングを見た。何も置かれていない机を挟んで椅子に

座っていた亜美ちゃんとママが口を大きく開けて僕を見つめていた。僕は二、三步進んでお座りをする。亜美ちゃんの瞳に涙が溜まり始めていた。真っ赤に充血した大きな瞳が綺麗に潤んでいく。あの日みたいだ。僕を拾ってくれたあの日みたいな目を亜美ちゃんは湛えていた。

椅子から、亜美ちゃんが立ち上がる。僕の尻尾は条件反射みたいに激しく動き始める。尻尾が切る空気の感触が懐かしい。戻ってきたんだ。身体中に力が。今日の僕は絶好調だ！僕は昂ぶる心で一声吠えてみた。力のある声が出た。出たからもう一回吠えてみた。さつきよりも大きくなった！

そんな僕を見て、亜美ちゃんは涙ながらに何度もうなずいていた。そして手で涙を拭くと、にっこり微笑んだ。

「おいで、セト」

僕は思いっきり亜美ちゃんに飛びついたんだ。

(End)

「春鮫の降る日」by 焼き鳥

夢をみるような声が聞こえた。

腕をだらしなく放り出したちゃぶ台の先にあるテレビは、何度も同じニュースを繰り返して、時折人が変わっていった。

カーテンを閉め終え、またキッチンに戻った妹が、焦がれるように言ったのだ。

「はちみつが食べたいんだけどね」

油が微かにはぜる音と、包丁が何かを切断する音が控えるめに聞こえており、一体何のことだかわからなくなりそうだった。

「はちみつ？」

黄金色の液体が頭の中に溶け出して、その中にびちゃりとくまがすわりこむ。それは焦げ茶色をして、密に生えた毛皮と短い尾・太くて短い四肢と大きな体、すぐれた嗅覚と聴覚をもつリアルな熊だ。さつき特集で、熊による被害を扱っていたのでつられた気がする。

妹は、数秒問いかけが聞こえなかったかのようにふるまうて、また、不意に喋りだした。

「そう。あのレンジやミカンやアカシアの、蜜から取れるやつ。それを、パンに塗ったり、飲み物に落としたり、お菓子に混ぜたりするんじゃないかって、そのままコップに入れて一気飲みするわけ」

それは無理だ。

人間業じゃない。

口、食道、胃の中がはちみつだらけになる絶望を妄想してしまい、脳の中のツキノワグマが金色の海に溺れて見えなくなる。

どうしてそんな恐ろしいことを言い出すのだろうと、ニユースを目に映しながら尋ねると、

「桜が、」

と妹は呟いた。

「咲いていたのを見た？」

その声とほぼ同時に、ブラウン管に見事な夜桜が映し出される。本年のさくら（ソメイヨシノ）の開花は、東北地方と東日本では平年より早く、西日本では平年並か早い見込みです。

見えた、と端的に答えると、

「この辺でいっちょ、春らしいことをしておこうと思っ
ね」

なるほど、咲いた花やそれを集めて飛び回るミツバチたちが生み出した栄養素の結晶はまさに春を凝縮したものに違いない。など微塵も思わなかった。だって花見に行けばいい。

「結局何が言いたかったんだ？」

談笑するニユースキヤスターを見ながら、手を洗っている妹に向け、率直に尋ねる。すると妹も背を向けたまま、簡潔に返答した。

「日ごろの感謝の念を持ち合わせる常識人であるならば、はちみつを買ってきてほしいと言いたかったんだよ」

始まった天気予報を見ながら、夕食前にスーパーまで車を走らせ、買い物籠の中に蜂蜜だけ入れて、レジを通過する人を脳内に思い描いた。

常識人じゃない。

南西の風 くもり 深夜からはるさめがふるところもありそうです。

はるさめ、か。天気予報の解説を、都合のいいように解釈した。

「でかい魚が降るかもしれないから、外出は止めとくよ」

「ああ、小さな旋風や竜巻が発生して、それらの旋風が水

上を移動した場合、軌道上にある魚やカエルを上空に巻き上げたまま風に乗って数キロを移動するという、あの現象のことね」

何か解説されたので、観念してネタばらした。

「なんじゃそりゃ。春雨のことだよ」

「よくわかったね」

声が近づき、目の前においしそうな揚げ物が、器に乗って降ってくる。からりとした金色の衣に、所々黒い胡椒がちりばめられていて、思わずつまみ食いした。サクツとした衣の中には、魚のタラと鶏モモ肉の中間からさらにきめ細かくシットリモチリさせたような身の美味しさで、うっすら上質の脂がのっている。思わず聞いていた。

「うまい。何の肉？」

「え？ いやだから、ヨロイザメ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7768c/>

劇場『すぽっと』

2010年10月15日23時41分発行